

「ベレト」とベレス先生

俺田マコト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「誰も死なない世界」を目指す為、何度も時を戻し続けたベレト。しかし天刻の拍動を使い果たし、遂に倒れてしまう。復活する為には代償が必要だとソテイスは告げる。その代償とは、自分の代わりにベレスが居る異界を、戦乱から救うことだった。

目 次

序章	復活の代償	1
大樹の節 1	必然ではなかつた出会い	3
大樹の節 2	傭兵騎士団と新任教師	12
豎琴の節 1	鹿の台地の実戦演習	19
豎琴の節 2	アビスとの遭遇	27
豎琴の節 3	谷の盗賊、地下の盗賊	34
花冠の節 1	暗雲の兆し	49
花冠の節 2	裏に潜むもの	56
花冠の節 3	霧中の調和	63
青海の節 1	地駆ける灰狼	71
青海の節 2	闇に入らずんば光を得ず	81

序章　復活の代償

「……終わるのか……」

1181年弧月の節、士官学校の教師ベレトは帝国兵の凶刃に倒れた。時を戻す「天刻の拍動」も使い果たし、最早生き延びる術はなかつた。彼の意識は暗闇へ沈んでいった…。

――――――

「おぬし！」

…！

「おぬしおぬしおぬし！疾く目を覚ますのじや！」

ゆっくりと目を開ける。見紛うこともない、緑の髪の少女。ソティスが目の前に立っていた。

「消えたと思っていた」

「消えてなどおらぬわ！『ひとつになる』と言つたじやろう」

「何故ここに？」

「そうじや！おぬしが開口一番消えたなどと言うから忘れておつたわ」

ソティスはいつもの玉座に座つて、すうと息を吸い――

「この大馬鹿者っ！時を戻す力が枯れるほどまでに乱用して、そこまでして死ぬとは何事じや！」

「すまなかつた」

「言い訳はきいてやろう。いつたい何の為にこんなことをしたのじや？」

少し考えてから口を開く。

「生徒たちが誰も死なない、平和な世界にしたかつた」

「おぬしのことじやからな、そんなことじやと思つておつた…。じやが、三国の主たちの師たるおぬしが死んでしまつた今、この世界の未来には闇しかないじやろう。犠牲の上に成り立つ平和すらも、おぬし無しには実現しないじやろうな」

「…！」

自分の存在がそこまで大きなものだとは思つていなかつた。

「そこでじや。おぬしに生き返るチャンスをやろう」
!?

「そんなことができるのか」

「忘れておるかもしけんが、わしは『はじまりの者』神祖ソテイスじや。容易くとはいかんが蘇生くらいできるわ」

なるほど、そういうことか。

「さて、その方法なのじやが…、厳しいぞ。その覚悟はあるか?」「もちろんだ」

迷うこともなく即答する。

「そうか…。では、説明するぞ」

「生物を蘇生させるには、それ相応の代償が必要じや。今からおぬしには、他の世界を救うことで代償として貰う。おぬしが望んだ、『誰も死なない世界』をひとつ、作るのじや」

「その世界は、今のところほとんどおぬしが居る世界と同じじや。違うところはまずひとつ、世界の未来の鍵を握る、その世界のおぬしは女性じや。名はベレス。そしてもうひとつ、おぬしが干渉するということじや」

「ベレスや生徒たちの選択を助け、或いは否定し、戦乱を起こさぬよう導くのがおぬしの役目じや。人の決意を曲げるのは厳しいじやろうが…、おぬしなら出来ると信じておるぞ」

ソテイスは話し終え、ほうと息を吐いた。

「さて、おぬしはこれから帝国歴1180年、大樹の節、19の日のルミール村近くの森に送られる。翌朝には級長たちが村を訪れる。それまでにベレスに会うのじやぞ」

「わかった」

「おぬしとは、しばしお別れじや。この世界と、もうひとつの世界を救うため、おぬしの全てを尽くすのじや!」

ソテイスが両手を広げる。

辺りに光が満ち、そして――。

大樹の節1 必然ではなかつた出会い

：世界の移動は、終わったのか？ ソテイスは森の中に転移されると言つていたはずだが、この体を包む感触はまるで羽のように柔らかで、温かい。自分は今、どこに居るのだろう。ゆっくりと目を開けてみる。

「おっ！」

「気がついたか？」

「平氣か？」

まだ何が何やらわからないが、頷く。

「おお、俺やもうダメかと…」

「そんなこと言うなよ、兄ちゃん。こいつはちゃんと生きてるぜ」

「そ、そうだな。まあどつちにしろ、あんなところで寝てたら風邪引いちまつてただろ」

そこまで聞いて気づいた。ここはジェラルト傭兵团の天幕、今話している彼らは兄弟傭兵のガープとベリアルだった。士官学校へ行ってからはあまり会つていなかつたので、すぐには気づけなかつた。

「ベリアル、団長に目を覚ましたつて伝えてくれ。俺が話を聞くとくよ。」

「おう！」

ベリアルが部屋を出て、団長…この世界の父さんの部屋のほうへ向かつていつた。

「よし。ちょっと色々と聞かせてもらうぞ。一応あなたは素性の知れない謎の男だからな…。あんた、何であんなところで倒れてたんだ？」

いつか聞かれるとは思つていたが、まだ何も答えは用意できていない。正直に「世界を救いに来た」などと言つても、信じては貰えないだろう。ここは少し不自然かもしけないが、賊に襲われたということにしておこう。

「盗賊に襲われたんだ」

「盗賊だと？ このジェラルト傭兵团が守る村に近づくなんて、そう

とう馬鹿なやつだな。…それは置いといてあんた、何のために森の中なんて歩いてたんだ?」

「故郷の村から、ガルグ＝マクに向かおうとしていた」

「おう、ガルグ＝マクか! 僕たちは行く予定が無いから、送つては行けないな…」

ガープは、少し人を信じやすい。彼が信じたおかげで殺されなかつた盗賊が傭兵として働いていたりするが、皆からは騙されないか心配されている。そんな性格が、今は自分の役に立つたというわけだ。

「おーい、団長を連れてきたぞ」

ベリアルが戻ってきた。後ろにはジエラルトがついている。

「ガルグ＝マクへ向かう最中で盗賊に襲われちまつたらしい」

ガープが話を進めてくれる。ジエラルトは、俺の目をじっと見つめてから口を開いた。

「そうか。あんた、名前は?」

「ベレトです」

この世界の自分はベレスという名前だから、本名でも大丈夫だろう。

「ベレト、あんたガルグ＝マクへ向かつているつて言つてたな? もう今日は遅い。一晩くらいなら、ここで泊めてやることもできるぞ。まあ、明日の夜明け前にはここを発つ予定だから、早起きに自信があればの話だが。」

明日の朝には級長たちと盗賊団、そしてアロイスたちセイロス騎士団もここへ来るだろう。

「では、お言葉に甘えて。お世話になります」

「そうか、俺はジエラルトだ。分からねえことがあつたら何でも訊いてくれよ。荷物を賊に奪われちまつたんなら、そことこの物なら貸して、いや貰つてくれて良いぞ。」

ガープだけでなく、父までもが自分を疑うということをしないのは驚いた。そればかりか、出発の用意まで整えてくれると言う。警戒されて当然だと思っていたのだが。そんなことを考えていたのが顔に出たのか、ジエラルトがその答えを口にした。

「なあに、何か礼でも貰おうつてわけじゃねえ。お前の目は悪いやつ
の目じやなかつた。それだけさ」

何故かはわからないが、ベレトにはジエラルトが嘘をついているよ
うに見えた。

その夜、傭兵団はルミール村での最後の日を村人たちの手料理で催
された宴で楽しんだ。ベレトも成り行きで参加することになり、自分
の世界でも同じことをしていたのを思い出し、とても懐かしい気分に
なつた。その時に自分が座つていた席——ジエラルトの隣——
には、女性が座つていた。隣で肉を食べていたベリアルが視線を捉え
て、教えてくれた。

「あいつは団長の娘さん、ベレスだ。手を出そうなんて考えるなよ？

団長が殺しにかかつてくるぜ」

ベレスは、当然といえど当然だが、自分をそのまま女性にしたよう
な見た目だつた。袖が特徴的な上着、髪や目の色、感情の出にくい表
情（自分も生徒たちによく言われていたが、やつと納得した）などだ。
それに、周りの男たちを差し置いて、とてもたくさん食べる。

後々の為にしつかりと目に焼きつけていると、ベレスもこちらを見
て、ジエラルトに何やら質問した。ジエラルトの答えに頷くと、向こ
うもこちらをじつと見つめてきた。そのままこちらからも観察を続
けることにしたが、彼女の顔にはときどき少し不思議そうな色が浮か
んでいた。あちらも自分との共通点に気づいたのかもしれない。

そして盛り上がりが最高潮に達した頃、ジエラルトが明朝早くの出
発に備えて寝るよう指示し、別れを惜しみながらもそれぞれが寝床へ
と戻つて行つた。

ベレスを見て気になつたことがあつたので、寝床へ入る前に鏡を見
てみた。髪と目の色は、ソテイスの力を得る前の色、今のベレスと同じ色に戻つていた。

この世界では、ベレスの髪をあの色にするようなことはさせない。
そう決意した。

毛布に包まり目を閉じても、この世界を救う使命と、明日の明け方
待ち構える級長たちとの出会いのことを思うと眠れなかつた。どう

すれば未来を変えられるのかということや、この世界では他人とはいえ父と丁寧な言葉遣いで話すのには違和感があるな、ということを考えているうちに、いつのまにかこの世界では初めての眠りに落ちていた。

――――

次の夜明け前、ベレトは周囲の傭兵たちとほぼ同時に目を覚ました。ベリアルが声をかけてくれる。

「おっ、寝起きは良いほうか？ もうそろそろ出発の時間だ。荷物は俺とガープで用意しといたからな」

「ありがとう」

数日ぶんの旅荷物が入った包みの中身を確認していると、向こうから会話が聞こえてきた。

「またあの夢でも見てたか？」

「少女の夢……」

「お前の話を聞く限り、そんな奴には会つたことはねえんだがな……。まあいい、そんなもん忘れちまえ！」

ということは、ベレスもソテイスの夢を見たということだろう。そしておそらく、あの戦争の夢も。

「次は王国での仕事だ。少し距離があるから、夜が明けたら出ると言つといたろ」

「そうだつ……たね」

「……まつたく。お前以外はもう外で待つてるぞ」

あれは「そうだつけ？」と言おうとした時の声色だった、とベレトは思つた。性別は違つても、自分のことは自分が一番よくわかつている。

と、そこへ一人の傭兵が駆け込んできた。

「ジエラルトさん！ すまんが、来てもらつていいか？」

「どうした？」

この先の未来を握る、重要人物たちが現れたようだ。

その傭兵について、外に出る。ジエラルトとベレス、そしてベレトや興味を持った何人かの傭兵たちが続く。

「突然、申し訳ありません！」

「こんな時間に、ガキどもが揃つて何の用だ？」

そこに居たのは、見紛うこともない、三人の級長たちだ。黒鷲のエーデルガルト。青獅子のディミトリ。金鹿のクロード。

「実は私たち、盗賊団に追われているんです。どうか力を貸していただけませんか？」

「盗賊、か……」

「ええ、野営中に襲撃されたのです」

エーデルガルトが答える。この頃にはもう教会や王国との戦争を計画し終わっていたのだろうか。

「上手いこと仲間と分断されて多勢に無勢、金どころか命まで盗られるところでしたよ」

「その割には随分とのん気な……。ん？ その制服……」

そこへ、ガープが走つてくる。

「村の外に人影！ チツ……かなりの大所帯だ」

「来やがつたか。つたく、ガキどもはともかく、この村を見捨てるわけにはいかねえ……。おい、行くぞ。用意はいいな？」

ジエラルトは周囲の傭兵たちを見回し、ベレトに目を留める。

「あんた、戦えるか？あまり客人を巻き込みたくないが、戦力は多いほうが良い」

「ええ、戦えます。武器はありますか？」

「助かるな。ベリアル、ベレトに剣を一本貸してやれ。…よし、行くぞ！」

傭兵たちと盗賊たちが雄叫びをあげ、剣と斧がぶつかる。ベレトも剣を振り払い、もう何度も目がわからぬ戦場へ、足を踏み入れた。

「ぐつ……！」

「うがあつ！」

二人の盗賊をまとめて斬り倒し、さらに次の賊の攻撃を防ぎ、また斬る。あの時は少し苦戦した盗賊相手にも、のべ4年の教師生活で能力が上がつたベレトの前にはかなわなかつた。

「やるな、あんた！」

「賊も傭兵もびっくりだよ！」

近くで戦っていたガープとベリアルがその動きに驚き、感嘆の声をあげている。

「ずっと鍛えていた。昨日の盗賊は汚い手を使つてきただが、正々堂々の勝負なら負けはない」

四年間鍛えた体で盗賊に負けたことへの言い訳だ。実際は負けていないし、違和感があるのは当然だが、傭兵たちには戦いの中でそんな事を考えている余裕はない。

「…だいたい片付いたな」

数分後、ベリアルが最後の1人を斬りながら言つた。

「思つてたより早く終わつたなあ。あんたのおかげだよ、ベレトさん！」

「団長たちを援護しに行くか？」

「いやあ、団長とベレスなら援護なんて要らないだろうな。あのガキたちも士官学校の生徒なんだし、弱つちいやつらじやあないだろうさ。まあどつちにしろ、指示を聞き逃すわけにはいかないし、団長のところへ行くぞ」

「おう！」

木々の間から聞こえるジエラルトの掛け声のほうへ、ベレトたちは向かつた。

「て、てめえ……まさか、『壊刃』のジエラルトか!? 何でそんな凄腕の傭兵が、ここにいやがるんだ!」

ベレトたちが森の端に着いたとき、ちょうどジエラルトが賊の頭と戦闘を始めたところだつた。

「文句を言いてえのは、巻き込まれたこつちだ……」

そんなことをぼやきながらも、ジエラルトの槍はしつかりと盗賊頭の体を捉える。体勢を崩したところへ、ベレスが追い討ちをかける。「これで決める！」

その一撃が、盗賊頭を吹き飛ばした。

「いやあ、さすがは団長の娘だ！ 格好いいなあ！」

ベリアルが興奮した様子で言う。確かに今のベレスの一撃はとて

も良かつたと思うが、まだこれで終わりではないことを知っている。

倒れていた盗賊頭がさつと起き上がり、エーデルガルトに向かつて斧を振りかぶつた。エーデルガルトが短剣を取りだそうとするが、間に合わない。

「危ない！」

ベリアルが叫ぶ。エーデルガルトの体を盗賊頭の斧が捉える、その直前。ベレスが間に割つて入り、斧を弾き飛ばした。未来を読んだかのような素早い行動は、「天刻の拍動」で時を戻したからだ。ベレスも、ソテイスと出会つたということだろう。

「おーい！」

クロードとディミトリが駆け寄つてくる。ベレトやほかの傭兵たちもベレスの周りに集まつてくる。

「ベレス？　お前、今何か……？」

ジエラルトはベレスの動きに違和感を感じていたようだ。そこへ、今度は別の聞きなれた声が響きわたつた。

「セイロス騎士団、ただ今参つた！　生徒を脅かす盗賊ども、覚悟せえ……い？」

セイロス騎士団を率いて現れたのは、アロイスだった。

「おい、盗賊が逃げていくではないか！　貴殿らは後を追うのだ！
さて、級長たちも無事のようだな。……と、そちらは……？」

「おつと……面倒な奴が来ちまつた……」

以前自分の世界で見たのとまったく同じように、アロイスはジエラルトに気づいた。

「やはり、ジエラルト団長ではないですか！　うおおお!!　お久しぶ

りですなあ!!　私のこと、覚えておられますか!?　自称“あなたの右腕”、アロイスですぞ!!　団長が突然いなくなつてから20年、ずっと生きていると信じておりました！」

「相変わらずうるせえ奴だな、アロイス……」

ジエラルトたちは話に花を咲かせていく、というよりほとんどアロイスが一方的にまくし立てていた。と、アロイスがベレスに気づいた。

「おや、もしかしてそちらの若者は、団長のお子さんですか？」

「はい、そうです」

「そうであつたか！ 見た目はともかく、雰囲気は団長にそつくりであるなあ。で、そちらはご兄弟ですかな？」

今度はベレトのほうを向く。ベレトは昨日のうちに、騎士団の新兵として雇つてもらい、ガルグ＝マクで行動するという計画を立てていた。そのためにも、アロイスの好感度を上げておくのが良いだろう。アロイスは冗談が好きだ。

「逃げ遅れた盗賊の一昧だ」

成功した、と思つた。アロイスは満面の笑みで冗談に笑つてくれた。

「あつはつは！ またまたそんな冗談を。団長と雰囲気がそつくりではないか」

「いや、アロイス。残念ながら、こつちは俺の息子じゃない。行き倒れてるところを、たまたまうちのやつに見つけられてな。一晩泊めてやつてたんだ」

「もう、それにしても何だかよく似ているような気も…。まあそれはそれとして、娘さんにも是非、大修道院を見てもらいたい。同行願えるか？」

ベレスは頷いたが、ジエラルトは何やら喉の奥で唸つた。

「どうかしましたか、団長。まさか逃げようなんて思つてませんよね？」

「かのセイロス騎士団を相手に逃げ出せるなんて、流石の俺も思つてねえよ」

視界の端で、ベレスが少しビクッとしたし、それから頷いた。自分もこの頃は、ソテイスに話しかけられると驚いてばかりだつた。

「さて、もちろんお前たちも大修道院まで着いて来てくれるよな？」「もちろんだ！」

「例え火の中、水の中！ 団長に着いて行きます！」

傭兵たちが応える。

「ベレト、あんたも大修道院に行くんだつたよな。一緒に来るか？」

「はい、そうしましよう」

数分後、ルミール村からジエラルト傭兵団とセイロス騎士団、そして級長たち、ベレトという列が出発したのだった。

大樹の節2 傭兵騎士団と新任教師

「なああんた、ちょっとといいか？」

騎士や傭兵たちの列がガルグ＝マク近郊の森に入つた頃、ジエラルトがベレトに声をかけてきた。

「ルミール村では、なかなか鋭く剣を振るつてくれたそうじゃないか。ベリアルから聞いたぞ。そこで、なんだが……、ジエラルト傭兵団に入る気はねえか？　もつとも、たぶんこれからはセイロス聖教会の傭兵になるはずだ。騎士団の端っこみたいなもんだな。ガルグ＝マクに行きたいって言つてた気がするが、どうだ？」

思つてもみなかつた好機だ。もとよりガルグ＝マクへは騎士として入り込むつもりだつたが、傭兵なら正規の騎士よりも自由に動きやすい。何より、自分自身は毎回学級の課題にジエラルト傭兵団を同行させていた。

「ええ、喜んで。よろしくお願ひします、ジエラルト団長」

「おう。ベレト、だつたよな？　よろしく、ベレト」

こうしてベレトは、この世界のジエラルト傭兵団の一員となつた。

ジエラルトは前方のアロイスたちのほうへ行つてしまつた。

それからほどなくして、前方から級長たちの話し声が聞こえてきた。

「……では、修道院は初めてか。良ければ後で案内しよう

「このフォドラの縮図のような場所さ、いろんな意味でね」

「……もうすぐ嫌でも目に入るわ」

森を抜け、級長たちとベレスの顔に陽の光が当たる。そして、目の前には壮大な建築物が広がつていた。

「あれが……、ガルグ＝マク大修道院よ」

ベレスにとつては初めての、ベレトにとつてはもう何度目か知れぬ、ガルグ＝マクだ。

「レア様……」

ジエラルトが呟く。

その遙か上のテラスで、大司教レアも呟いていた。

「時のよすがに……手繰り寄せられたのでしょうか……」

一団はガルグ＝マクの市街に足を踏み入れた。大修道院に集つた者たちが暮らす街だが、戦乱の時代には戦場にもなつた。ベレトが自分の世界で倒れた戦場も、この市街である。そして門を抜けると、市場に出る。市街にも商店はあるが、大修道院の職員や士官学校の生徒たちはたいていここを利用する。石段の上では門番さんが出迎えてくれている。

「皆さん、お疲れ様です！　本日も異常なしであります！」

「うむ、うむ！　土産話も土産物もたっぷり用意しておるぞ」

「ええ、楽しみにしています。アロイスさんと話していると、いつもとても楽しいですかね！」

「むつ、褒めても何も出んぞ。はつはつは！」

そんな会話を繰り広げてから、一行は建物の中へと進む。

「生徒諸君！　いろいろとあつたが、今日のところはこれで解散！　自分の部屋でゆつくり休むといい。騎士団も、休息をとるように」

生徒と騎士たちがわらわらと寮へ戻つて行く。玄関ホールには、ジエラルト傭兵团が残つていた。

「ジエラルト殿、ベレス殿も、大広間の2階、謁見の間へ来てください」「謁見の間だな。行くぞ、ベレス。レア様と会うのも何年ぶりか…」

そんなことを呟きながらジエラルトは大広間へ向かつた。ジエラルトは扉を出る直前に振り返つて、アロイスにほかの傭兵たちを兵舎に案内するよう言つた。

「たぶん、俺は騎士団に戻ることになるだろうからな。その時は、こいつらも一緒だ」

「長年の仲間意識というやつですな。さすが団長、仲間想いですな。では諸君、これから貴殿らをセイロス騎士として扱うことになる。まあ騎士と言つても、セイロス教団が雇い主の傭兵、といつたところだ。仕事の内容はさして変わらんはずだぞ」

困惑しているような一部の傭兵の顔に気づき、アロイスが補足する。

「では、こちらだ。付いてきてくれ」

案内された騎士たちの寮は、騎士の間の裏手だった。この方面は生徒たちが立ち入り禁止なうえ、騎士団や傭兵団の面々もだいたいの場合は騎士の間か訓練場で見つかるため、こちらへはあまり来る機会はなかった。

案内された騎士の寮は、生徒や教師の部屋とは違った相部屋ではあったが、そのぶん広い。傭兵団の天幕よりも、ひとりひとりの空間がとれそうだ。日々新兵が増えることを見越してか、部屋は綺麗に整えられている。傭兵たちは、ちょっとした興奮状態だ。

「さあ、ここが貴殿らのための寮だ。基本的には1階を使ってくれ。女性諸君は2階へ。あとで団長も来るだろうから、それまでゆっくりと休んでおいてくれ」

アロイスが立ち去り、傭兵たちがひとしきり騒ぎ終わつた頃になつてから、ジエラルトとベレスもやつて來た。

「おいお前ら、騒ぎすぎじゃあねえか？　俺たちの天幕が狭かつたのは認めるが、そこまではしやぐこたあねえだろ。それは置いておいて、急にセイロス騎士団に入れることになつちまつて、申し訳ない」「いやいや、こんな凄い部屋に住めるんなら全然大丈夫だよ！」

さつきまで寝台で飛び跳ねていたベリアルが応える。

「随分と楽しんでるな、ベリアル。俺は騎士団長の部屋を使うことになるから、ここには居ないぞ。それから、ベレスは教師をやることになつたから、お前らとは別だ」

「ここであちこちから驚きの声があがつた。

「教師?!」

「まさか、士官学校の？」

ベレトも、わかりきつたことではあつたが驚いたふうに見せる。

「いちばん驚いてるのは、わたし本人だけど」

「いや、たぶん俺だ。アロイスが推薦したのも、レア様が認めたのも、全部驚きだ。レア様が何を考えてるのか、さっぱりわからん。」

ベレスとジエラルトは2人でぼやき合つてゐる。確かに自分も、教師になることを初めて聞いたときはかなり驚いた。その驚きのなかで傭兵たちの寮に来たとき、自分もそんなことを言つていたかもしだれ

ない。

「それじゃあ、わたしは生徒たちの様子を見てくることにするよ。どの学級を受け持つかも決めないといけないし」

「そうか。お前らも、騎士団の奴らと仲良くしつけよ」

ベレスとジエラルトは寮を出ていった。

その後すぐにアロイスが呼びに来た。セイロス騎士として初めての訓練をするそうだ。訓練場へ向かう途中、エーデルガルトと何やら話しているベレスを見かけたが、ベレスはもう士官学校に馴染んでいるようだつた。

訓練場では、何名かの騎士が待つていた。カトリーヌの姿も見える。

「よう、アンタたちが噂のジエラルト傭兵団か？ 待つてたよ。アタシはカトリーヌだ。よろしくな」

「よろしくお願ひします」

返事をしたのはベレトだけだつた。ほかの傭兵たちはカトリーヌの「雷霆」が気になつてゐるようだ。

「なんだよ、活気がねえなあ。さて、今日はここに居る奴らと打ち合つてもらう。あんたらがどれ程の実力か、見極めさせてもらうよ。ああ、さすがにこの『雷霆』は使わないから、安心しな」

ベレトには、周りの傭兵がほつと息をつくのが聞こえたような気がした。

「それじゃあ、さつそく始めようか」

傭兵たちは、騎士との打ち合いを始めた。どの組も接戦で、カトリースとアロイスも端のほうで見ている。

「さすがだな、兄ちゃん！」

「ははっ、ありがとな、ベリアル」

ガープが騎士との打ち合いに勝つて戻ってきた。次はついに自分の番だ。

「よろしく頼む」

相手の騎士に声をかけ、訓練用の木剣を構えて向かい合う。順番が最後だつたので、試合を先に終えた傭兵たちの視線を感じる。試合開

始だ。傭兵時代と、4年間の教師生活で身につけた技で、相手を翻弄する。

決着はすぐについた。騎士の首もとに木剣を突きつける。

「勝負あり！ なかなか強いな、アンタ。名前は何ていうんだ？」

「ベレトです」

「ははっ、良い名前だな。気に入ったよ、アンタの剣さばき。傭兵らしさも騎士らしさも感じる剣だつたよ」

他のほとんどの傭兵たちよりも長い間、しかも強い意志を持つて訓練してきたのだから当然といえば当然だが、べた褒めだと思った。いつだつたか、シャミアが褒められると伸びるたちだと言っていたのを思い出したが、カトリーヌは褒め方を心得ているのだろうか。

「それじゃあ、今日はここで終わりにしよう…」

「…待て」

何者かが、カトリーヌの言葉をさえぎつた。声がした入り口のほうに目を向けると、いつの間に入ってきたのかイエリツツアが居た。そういえばベレトの世界でも、この日イエリツツアは訓練場前に居た。「どうしたんだ、イエリツツア」

カトリーヌの言葉には耳を貸さず、イエリツツアはまつすぐにベレトの目の前に来た。

「お前の剣は見事だった。俺と、死合え」

イエリツツアの言う死合いとは、手合わせのことだ。ベレトの世界でも、何度も死合つた。

「…今は、断らせていただく」

仮面に隠れてよく見えなかつたが、イエリツツアの顔に不満の色がよぎつた。ベレトとしても手合わせに応じたいのはやまやまだが、今はそうできない理由があるのだ。

その理由というのは、イエリツツアが剣で相手を判断することだった。ベレトの剣は、4年ぶんの教師生活を経たとはい、ベレスの剣と同じだ。イエリツツアこと死神騎士がベレスと戦う際に、自分の剣を通してベレスの動きを読まれ、ベレスが敗れるなどということがあつてはいけない。少なくとも、ベレスが死神騎士と一度戦うまでは

手合わせはできない。

「またいつか、こちらの準備ができるまで待つてもらいたい。その時には、全力で臨ませてもらう。この約束は違えない」

「…その刻が、近い日であることを祈ろう」

意外にもあっさりと、イエリツツアは去つていった。

「いやあ、まさか断るなんてなあ。アタシも予約を入れておくことにするよ。楽しみに待つてな、ベレト！」

カトリーヌは冗談なのか本気なのかよくわからない口調だつたが、こちらともいつか手合わせすることになるだろう。

「皆、見事な剣さばきだつた。さあ、それでは寮に戻るぞ。いや、この時間なら食堂に行つたほうが良いかもしれん」

確かに空はもう夕焼けで、美しい赤色に染まつていた。

食堂へ向かう道中、大広間の2階から降りてきたベレスと出くわした。

「先生1日目はどうだつた、ベレス？」

ベレスの女傭兵仲間、アスモーデが声をかける。

「受け持つ学級を選んだんだ。金鹿の学級だよ」

ベレトも、最初は金鹿の学級を選んだ。だが、戦争が始まる未来を変えるため、何度も学級を選ぶ前に時間を戻したのだ。

2度目の選択では、帝国に味方してエーデルガルトを内部から説得するため、だがエーデルガルトの意思は強く、戦争を止めるることはできなかつた。

3度目の選択では、青獅子の学級を選んだ。エーデルガルトが戦争を始めたことに最も驚いていたようすのディミトリなら、エーデルガルトとの親交もあり、説得できるかもしれないと思った。しかし、ディミトリは心を病んでしまい、むしろ王国と帝国の戦争を激化するような結果になつてしまつた。

そして最後には、何か変えることができる部分を探した末に、黒鷲の学級を受け持ちながら、エーデルガルトを裏切ることにした。もちろん未來が変わらはずもなく、遂には時間を戻す力も使い果たし、戦場に倒れたのだった。

「昔、父さんに師匠として教えてもらつたらしい子がいてね」
もちろん、これはレオニーのことだ。選んだ理由も、自分とまったく同じだ。

「金鹿の学級といや、同盟領の生徒たちだよな」

「自由そうな学級だなあ。うまく取りまとめてやれよ!」

傭兵たちからの声援にうなずいてみせ、ベレスは士官学校の教室へ向かつた。

それからの数日間は騎士団の任務や訓練などで忙しかつたが、ベレスの教師としての初陣、学級対抗戦の日にはジェラルト傭兵团が揃つて同行することを許された。ジェラルトとその傭兵团に見守られながら、ベレスたち金鹿の学級は見事勝利を収めた。ベレスとレオニーの大活躍で、あくまで公平な立場のジェラルトも嬉しそうに見えた。こうしてベレスは、士官学校の新任教師としての第一歩を、軽やかに踏み出したのだった。

豎琴の節1 鹿の台地の実戦演習

もとジエラルト傭兵団の面々がセイロス騎士団として活動する準備をしているうちに、フォドラは豎琴の節を迎えていた。

11日の日のお昼ごろ、訓練を終えた後に食堂を目指して歩いていると、教室から出てきたらしいクロードに声をかけられた。

「やあどうも。この前は助かりましたよ。改めてお礼を…」「いや、困っている人の助けになることは当然のことだから、構わない」

「ははあ、器が広いですね、ジエラルト傭兵団ってのは。おっと、まだ名乗つてませんでしたね。俺はクロード＝フォン＝リーガン」

「ああ、ベレス先生から聞いて知っている。金鹿の学級の級長だつたな」

ベレスは、教師生活が始まつてすぐに、傭兵仲間たちに助けを求めてきた。ベレスよりは社交的な傭兵たちの力も借りて、なんとか教師としてやっていくことができているようだ。その時に、金鹿の学級の生徒たちについても話してくれたので、ベレスから聞いたというのは嘘ではない。

「そう、級長です。では、早速本題といきましょうか。」

そう言つてベレトを見たクロードの目は、クロードらしい腹の中の読めない目だ。

「ベレス先生について、知つてることをできるだけ話してほしいんですけど。級長として、担任のことはよく知つておきたいんですね」

こう言つてはいるが、目的はベレスの弱みを握ることだろう。クロードなら間違いなく、弱みを握れない相手を近くに置きたくはないだろう。

今、この世界でベレスについて一番よく知つているのは、おそらくベレス本人を除けば異界の同一人物であるベレトだ。しかし今のベレトは、ベレスに初めて会つたのはたつた1節前という設定で、ガルグ＝マクに居る。あまりよく知つていては不自然だ。

「すまない、俺はつい最近ジエラルト傭兵団に入つたばかりで、ベレス

先生に初めて出会つてからの期間も、君たちと同じくらいだろう。ベレス先生のことは、まだあまり知らないんだ。」

「へえ、そうだつたんですね。てつきり、かなりの古参かと。若いわりに剣術が完成されていて、傭兵歴も長いような感じがしましてさすがはクロードだ。ただの新人傭兵でないことは既に見透かされている。」

「ああ、ジエラルト傭兵团に入る前から、傭兵はやつていた。観察眼には自信があるのか？」

「人を見る目に限れば、まあそうですかね。じゃあ、自分はこの辺で失礼します」

クロードは教室に引つ込んでしまった。

自分の正体に関してのことは明かさなかつたつもりだが、クロードには間違いなく何かしらを隠していることを読まれてしまつただろう。いつかは正体を明かし、戦争を止めるために協力してもらうつもりではあるが、今はまだその時ではない。

もとの世界でもクロードは担任のベレトについて探つていたのか、ということは考えないことにした。

食堂に着くと、ベレスとアロイスが居た。何やら話をしている。ベレトが近づくと、こちらに気づいたようだ。

「おおっ、貴殿は確か…。先日、私が団長の息子と勘違いした方だったな！ ジエラルト傭兵团の一一番新しい団員になつたのであつたな。となると、先生の課題にも同行するのであろう？」

「ええ、そうですね。よろしくお願ひします、ベレス先生」

「ええと、堅苦しいのは苦手だから、普通に接してくれていよい。傭兵团ではわたしが先輩だけど、歳も近いみたいだし」

「それじゃあ改めて、よろしく、ベレス」

「こちらこそよろしく、ベレト」

「はつはつは！ やはり、団長の元に集う者は皆、仲良くなるのだなあ」

これからのために、ベレスとは良好な関係を築いておきたい。その第一歩は踏み出せたようだ。

と、そのとき、ベレスのおなかが鳴った。

「…それじゃあ、もつと仲良くなるのも兼ねて、食事でもどうかな。アロイスさんやベレトのことを、よく知つておきたいから」

「おおつ、このアロイス、団長のご子息と共に食事ができるなど、まさに幸運というものでですぞ！」

アロイスの笑顔が、もつと笑顔になった。

今日のメニューは、アロイスの好物である豪快漁師飯。特に好き嫌いのないベレトとベレスは、腹を満たせるならたいていのものが嬉しい。

「ルミール村で初めて会つたときから思つておるのだが、貴殿らはお互いによく似ておるなあ。まるで双子の兄妹のようだ！ はつ、まさか本当に…？」

もちろんあたりまえのことだが、今はその理由を明かしてしまわけにはいかない。

「いや、俺の両親はもう主の御許へ逝つてしましましたからね。ありますまいと思ひますよ。ジェラルト団長が実は幽霊だった、とかではない限りは」

「ま、まさか。見たところ、まだ団長には足がありましたぞ。…騎士として情けないことではあるが、私はどうもこの手の話が苦手でなあ」
ちよつとした冗談のつもりが、怖がらせてしまつたようだ。思い返してみれば、怪談は苦手だと言つていた気がする。相手を間違えてしまつたようだ。黙々と魚を食べ進めるベレスの表情からは、どう思つているのかは読み取れない。洒落がうけなかつたときのアロイスの気持ちがわかつたような気がした。

話題を変え、ベレスに話を振つてみる。

「今節の課題の準備はどうだ？」

「生徒たちにとつては初めての実戦だから、その前にもう少し戦闘の訓練をさせたいかな」

「うむ、各学級セイロス騎士団との実戦演習を行う予定であるな。た

しか来週の週末だつたはずだが
緑の多い高地での演習だつた。ベレトも、前週にジェラルトに配備

してもらつた騎士団の三部隊を率い、本格的に兵法を覚え始めた頃だつた。

「騎士団の指揮は問題なさそうか？」

「ジェラルトが兵法の本を貸してくれた」

「うむ、それならば問題無からう。騎士団長の部屋の本棚には、指揮でもなんでも、戦いに必要なことは全部敷き詰まつておるからな。指揮だけに。はつはつは！」

「うん、役にたつことがたくさん載つているよ」

アロイスの洒落を完全に受け流し、ベレスは話を進めるのだつた。

それから程なくして、三人は漁師飯を食べ終わつた。

「いやあ、やはり三人以上の食事は格別であるなあ。楽しい食事であつたぞ！ では、私はこの後任務があるので失礼する！」

「頑張つて」

「この程度の任務、ちよちよいのちよい、よ！ すぐに片づけて帰つてこよう！」

アロイスは玄関ホールのほうへ去つていつた。食堂にはベレトとベレスが残された。

「俺たちも、来週の演習を共に頑張ろう」

「うん、そうだね」

もう一度お互に声を掛けあい、食堂を後にした。

――――――

18の日。今日は騎士団との実戦演習だ。前節の模擬戦よりも多くの生徒が、出撃準備をしている。ジェラルト傭兵団、セイロス教団兵、セイロス傭兵団も装備を整えている。ベレスは、クロードから騎士団の運用を教わつてゐる。

そんな中、ひとりの生徒がベレトの目に留まつた。青獅子の学級の生徒のはずの、シルヴァンが居る。何故金鹿の学級の出撃に來ているのだろうか、と思つたが、すぐに納得のいく結論が出た。今の金鹿の学級の担任は男のベレトではなく、女のベレス。女好きのシルヴァンなら、十中八九ベレスの授業を受けるためだらう。…ベレトが教師だつたときは、マヌエラが担任の学級には移動していなかつたはずだ

が。

そういうしていのうちに、模擬戦の開始時刻になつた。ベレトたちジエラルト傭兵団は、ベレスの後ろで配置につく。

「…それでは、開始！」

兵士の声が響きわたる。開戦だ。

「クロードたちの部隊は、北側に進んで。こつちの部隊は、わたしと一緒にこつちの森に入ろう。視界が悪いから、敵の攻撃を一旦避けてから反撃する。森の向こうで合流しよう」

ベレスがてきぱきと指示を出し始める。生徒たちも、それに従つて行動を開始した。

「よしラファエル、攻撃を受けるか？」

「おう、任しとけえ！」

北に進んだラファエルに、兵士たちが先制攻撃を仕掛けってきた。ラファエルは少し怯んだものの、耐えて反撃を繰り出し、勢いをつけてもう一度攻撃して、先頭の兵士を撃破した。だが、その後ろからふたりの兵士が迫つている。

「はつはは、やるねえ。俺たちも、この武勇にあやかろうか。リシテア！」

「はいっ！」

クロードの矢と、リシテアのドーラ△がそれぞれ兵士を捉える。ローレンツが連携し、片方の兵士を撃破した。

「ヒルダさん、貴女も早く追撃してくれたまえ！」

「ええー、あたしは後方支援ですってー」

「その斧は何のために持つているんですか」

「ああもう、仕方ないなー」

こんなやり取りをしている間も律儀に待つていてくれた兵士にヒルダが一撃を入れ、撃破する。

「次は実戦だからな、ヒルダもこんなこと言つてられなくなるだろ」「ちよつとー、怖いこと言わいでよクロードくん」

「ヒルダ、クロード、次の敵に備えますよ」

リシテアの注意で、戦闘に意識を戻し、敵の位置を探る。

「よし、あつちの森を回り込んで、先生たちと合流しよう」

クロードの部隊は、東へ進み始めた。

その頃、ベレスの部隊は森の中で東の部隊を迎撃していた。木の陰から繰り出された兵士の槍を躱し、反撃の一連撃を叩き込む。次の兵士の攻撃も躱して反撃したが、追撃は避けられてしまつた。まだ撃破判定にはなつていない。

「レオニー！」

「あいよ、先生！」

レオニーが後ろから飛び出し、確実に槍を当てる。これで森の中に居る敵はあとひとりだ。

「イグナーツ、當てにくいかもしないけど、あの兵士を狙つてみて。シルヴァン、イグナーツと連携して攻撃を仕掛けて」

「おうさ！」

「やつてみます！」

まず、シルヴァンが攻撃を仕掛ける。見えにくいところから不意をついたが、こちらも反撃を受けてしまつた。が、兵士が次の手を繰り出す前に、イグナーツの放つた矢がしつかりと兵士を捉えた。

「やつたあ、やりましたよ！」

ベレスは喜ぶイグナーツに「冴えているね」と声をかけて、周囲の状況を確認している。

「北の2つの部隊を、クロードたちと挟撃しよう。森を抜けて、攻撃の準備をするよ。マリアンヌ、みんなを回復してあげて」

「は、はいつ」

「くつ、挟まれたか…。迎撃隊形で迎え撃つぞ！」

兵士たちの部隊は、合流して陣形を組み始めた。

「敵が固まつて いるから、あの手を使つてみよう。ジェラルト傭兵团、突撃用意！」

ベレスの指示で、ベレトたちも計略の準備を整える。兵士たちの頭の向こうには、クロードたちが見える。そちらでも計略の準備が整つたようだ。

「逃がさない！ 突撃つ！」

ガードを先頭にして、ジェラルト傭兵团が一斉に突撃する。ベレトも、かけ声とともに走り抜け、剣を兵士に当てる。

「援護しよう、今だ！」

「こういうときは、みんな、頑張つて行つてきてねー！」

敵陣の向こうからクロードとヒルダの声が聞こえた。

ジェラルト傭兵团が駆け抜けたころ、セイロス教団兵とセイロス傭兵团も、計略で兵士たちの陣に押し寄せた。その猛攻で陣形は崩れ、兵士たちは動搖している。

「続きます！」

「手伝うぜ」

ほかの生徒たちも、続々と追い打ちをかける。兵士たちはつぎつぎと撃破されていく。

「ぶつ飛べえ！　うおりやああ！」

最後に残った敵将も、ラファエルの強烈な一撃を受けて撃破された。金鹿の学級の勝利だ。

「よし、やつたねみんな。節末の課題出撃は、もう大丈夫かな？」

「ああ、俺たちならやれるさ。な、みんなそうだろ？」

「そうだな、僕も貴族としての債務を果たすことができそうだよ」

生徒たちは、わいわいと話し始めた。この調子なら、課題出撃は大丈夫だろう。少なくとも今節の終わりまでは、心配することはなさそうだ。

そうこうしているうちに、敵役の兵士たちも装備を整えたようだ。

「みんな、大修道院に戻ろうか」

勝利に浸る金鹿たちが、ガルグ＝マクヘと列を成して戻つていった。

――――――

25の日。金鹿の教室では、ハンネマンが弓術と理学についての講習を行っている。ベレトはその前を通り過ぎ、訓練場へ向かった。

だが、訓練場に入る前に、奇妙な人影を発見した。生徒寮と浴室への階段の間、薄暗い場所に何者かがいる。念のため腰の剣に手をかけ、近づく。

「おい、ここで何をしている?」

その男はびくつとして、警戒した目でベレトを見つめる。

「あんたは…。騎士さんですか。失礼しました、私は地下に戻りますよ」

「地下…? ガルグ＝マクに、地下があるのか?」

思わず疑問が口をついて出る。去りかけていた男が、振り返つて答えた。

「…ガルグ＝マクの地下を『存じない』? あそこは、地上にいられぬ者の楽園ですぞ。ここで手に入らない品でも、地下では手に入れられるかもしませんな」

豎琴の節2 アビスとの遭遇

「…ガルグ＝マクの地下を存じない？ あそこは、地上にいられぬ者の楽園ですぞ。ここで手に入らない品でも、地下では手に入れられるかもしれませんな」

男はそう言つて、にやりと怪しい笑みを浮かべた。

地上にいられぬ者、ここで手はに入らない品、普通に考えれば、とても危険なものであるようだ。だが今のベレトは、今まで関わることのなかつたそういういたものの中に、戦争を止める鍵が見つかるかもしれない、と思つた。

「では、俺を地下へ案内してくれないか？ 少し、調べたいことがあるんだ」

「私はべつに構わないのですが…。地下には、騎士嫌いの者や、地上の者を恐れる者もいます。じゅうぶんに、気をつけてくださいますね？」

男に向かつて頷いてみせる。

「では、こちらへ…」

男は地面の石畳を探り、床の隠し通路を開いた。その中に体を滑り込ませ、ベレトに手招きする。通路を覗き込むと、梯子が下へと伸びていた。

しばらく歩くと、通路に座りこんでいる男がいた。
「や、あんたは…騎士さんですかい。俺は、ここで番人みたいなものをさせてもらつてます。厳しく見張るというよりは、のんびり眺めるほうですけど」

番人ははあーっとため息をつき、面倒くさそうに顔をあげた。
「あんたのせいで、今日は異常ありますよ。久しぶりに番人らしいことをでもしてみますか。おーいユーリス、ちょっと来てくれえ」「呼ばれなくてもいるさ。簡単にアビスへ入られちや困るんでな、誰か来たらわかるようになつてんだ」

番人の背後の通路から、薄紫色の髪の青年が現れた。

「俺がユーリスだ。率直に聞くが、あんたはなんでここへ来たんだ？」

「この人からアビスのことを聞いて、気になつたんだ。少し探検でもしてみたいと…」

「た・ん・け・ん？ そう仰いましたか？ 騎士団員というのなら、ここをどこだかご存知ない、はずはありませんわね？」

いつの間にやらユーリスの隣に現れていた、貴族令嬢らしき風貌の少女が口を挟んできた。

「言い訳が下手ですわね。貴方の真の目的、この私が言い当ててさしあげましよう！ ズバリ、アビス住民の排除を目論む教団の指示で、介入の口実を探しに来たのですわね！」

「そのへんにしとけ、コンスタンツエ。騎士団だつて、全員が全員、何でも知つてゐるわけじやねえ。それに、つい最近、有名な傭兵団が騎士団傘下に入つたそうだ。おおかた、そこ出身の傭兵が、初めてのガルグ＝マクを端から探検してゐ、つてとこかもな」

ユーリスに諫められ、コンスタンツエと呼ばれた少女は不満げながら口を閉じた。

「だいたいそんなところだろ？ なああんた」

「まあ、そうだな」

「なら、ひとつ聞きたいんだが…。この商人、ファイルマンと一緒に入つてきたつてことは、こここの存在はこいつに教えられたんだよな。ここは、探検してみたいほど魅力的だつたか？」

確かに、ベレトは商人ファイルマンの言葉を聞いて、ここへ來た。世界を救う目的のために何か見つからないかと期待してのことだが、明かすわけにはいかない。ある程度濁して答えることにした。

「ああ。地上にないものが見つかるなら、自分が探しているものもあるかもしれない、と思つた」

しばらくの沈黙の後に、ユーリスが口を開いた。

「まったく信じられないほどじやあねえが、微妙なところではあるなあ。もうひと押しほしいところだが、その探し物とやらをずげずけ訊ねるのも野暮だろ。仕方ねえ、あいつを呼ぶとするか」

そう言つてユーリスは、コインを一枚、床の石畳に落とした。チャリーン、という音が、地下通路に響く。

数秒の後、通路を曲がって男が走ってきた。

「今、金の落ちる音が：つて、ユーリスかよ?!」

「悪い悪い、お前を呼び出すにはこれが一番早えと思つてな」

「確かに間違つちやいねえが、何か根本的に間違つてるような気がするぜ、俺は」

現れた男は、戦闘慣れしていそうながつしりとした体格だつた。傷も何ヵ所か見える。

「さて、こいつはバルタザールだ。バルタザール、こちらは地上から地下探検に来た騎士さんだ」

「騎士だとお？ なるほど、探検なんてつまらねえ嘘に俺たちが引っかかるとでも思つたか？ てめえから地下を護るために、この『レスターの格闘王』ことバルタザール様の力が必要なんだな？」

「そうじやねえ、まあそう焦るな。ところであんた、格闘は得意か？」 ベレトは頷いてみせた。格闘は、昔から剣と同じくらい得意だつた。

「だつたら話が早い。バルタザール、お前の『相手のことを知りいただきや、まず拳で語り合う』を実践するときが来た」「何ですつて!? そんな気品の欠片もない方法で、人の真髓を見通せるとでも言うつもりですか、ユーリス？」

コンスタンツエが驚きの声をあげる。

「ああ、そうさ。だいたいは俺の目と耳で確認したつもりだが、別の方面からも攻めてみないとな」

ユーリスは大して表情も変えずに答えていた。
「確かにそうかもしだせんけれど、もう少しほかの方面もあつたのではなくて？」

「まーいいじゃん。バルトはそれで今までやつてきたわけだし」

またひとり、通路の奥から少女が現れた。リンハルトを思い起こすような、眠たげで面倒くさそうな表情だ。

「キミたち、うるさすぎでハピ寝れないし。もうちよつと声落としてよ」

「悪いハピ、邪魔したな。ちょっと、外からお客様でな」

「うん、だいたい聞こえてたし。バルトと拳で語り合うんでしょ？
ずっと寝れなくてため息つく前に、さつきと終わらせてよ」

ため息をつく前に、とはあまり聞かない例えだ。それとも、このハピという少女にはため息をつきたくない理由もあるのだろうか。
「んじゃ、ちょっと移動するか。ここじゃ狭いからな。こっちだ」

ユーリスの後について行くと、通路が少し広がった空間に出た。番人とフィルマンとは先ほどの通路で別れ、ベレトとユーリス、バルタザール、コンスタンツエ、ハピという面子が揃つた。

「さて、ここが今日の戦場だ。準備は良いか？」

「おう、任せろ！」

「ああ、いつでもいける」

バルタザールと向き合い、構える。

「よし、存分にやり合え！ 開始！」

お互に籠手は装備せず、素手格闘が始まった。

『レスターの格闘王』の拳、受けてみな!!

バルタザールが先制攻撃を仕掛けてくる。

「見えたっ！」

連續で繰り出される左右の拳をひらりひらりとかわし、こちらも反撃する。そのまま攻勢に移行したが、籠手をつけていないので腕がいつもより軽く、感覚を掴みにくい。連撃のどどめを回避されてしまった。

「甘えな、ほれい！」

反撃の一撃が横腹を掠める。直撃していれば、大ダメージを受けていただろう。それでも怯まずに、こちらも追撃する。蹴りも織り交ぜ、反撃の隙を与えない。

「逃がさない！」

相手が少し怯んだ隙をつき、強い一撃を叩き込む。バルタザールは、尻餅をつくような形で床に倒れた。しかし、笑っている。

「へつへつへ…。なかなか強いじゃあねえか…。だが、俺にはわかるぜ。手加減してるな？」

確かに、ベレトは少し加減していた。傭兵時代から鍛え続け、更に

教師として奮闘しつつ4年ぶんの時を過ごしたのだから、ベレトの戦闘力はかなり強まっているはずだ。バルタザールの「拳で語り合う」方法は、意外にも正確なようだ。

「しつかしだ。俺はそれでもお前に勝てない。でかい実力差があるのがわかるぜ。だったら、俺が勝つには…」

バルタザールの目が、ぎらつと光った。

「手加減してもらつてるうちじやなきやあな！ 吹つ飛べ！」

バルタザールの強烈な一撃が、ベレトの胸を捉えた。体が吹き飛ばされる。

「ぐつ…、」

「追い詰められるほど、力が湧くつてな！ お前が俺様を追い詰めてくれたおかげさ！」

地面に倒れたベレトに、バルタザールが迫る。

「風穴空けてやるぜー！」

バルタザールは大きく右腕を振りかぶり、ベレトに向かつて振り下ろした。

先ほどの打撃でぼんやりとしていた意識が、急にはつきりしてきた。振り下ろされる拳が、妙にゆつくりと見えた。素早く横に転がつてかわし、立ち上がる。

「！ なに…っ」

攻撃がはずれて驚いた様子のバルタザールに、そのまま二連撃を打ち込む。

「これで決める！」

ベレトが放つたどめの一撃はバルタザールの胸を強打し、今度はバルタザールが吹き飛ばされた。

「そこまでだ！ バルタザール、命を取ろうつてわけじやねえんだから、やりすぎるな。騎士さん、あんたもだ」

ユーリスがふたりの間に割り込み、お互いを制した。

「すまなかつた」

「いやあ、久しぶりに俺様が本気を出しても死なねえくらいの奴と戦つたぜ。血が滾つちまつた」

バルタザールは、腰や胸のあたりをさすりながら立ち上がった。

「で、バルタザール。騎士さんの素性はどうだと思う？」

「ああ、そういうやそのための戦いだつたな。ひとりの戦士として、尊敬したいような感じだつたな」

「そうか、それなら大丈夫そうだな。ふたりとも、今回の健闘を称えて握手しな」

ベレトとバルタザールは、ユーリスに促されるままに握手した。先ほど初めて会つたときとは違い、戦友を見るような目をしている。「んじゃ、改めて自己紹介だな。俺はユーリス。こいつがバルタザールで、そこの『令嬢』いや、元『令嬢』がコンスタンツエ。あっちで寝てるのがハピだ」

「ベレトだ」

「よろしくな、ベレト。これからはいつでもアビスに来てくれて構わないが、安全は保証しないぜ。まああんたなら、襲われても大丈夫だろうが」

ユーリスがにやつと笑う。ベレトも微笑み返した。

「ユーリス、本当にこんないい加減な方法で判断しても大丈夫なんですか？」

「もつともな意見だが、これでも俺はバルタザールの腕を買つてるんでね。もしベレトがアビスを襲撃したって、一応策はあるからな」ユーリスはまたにやりとしたが、今度は目が笑つていなかつた。

「んじゃ、街のほうへ戻るか。起きな、ハピ。終わつたぞ」

「ううーん…。あ、おはようユリー」

ユーリスが、いつの間にか眠つていたらしいハピを起こしに行く。「街に戻るぞ。とりあえず、このベレトは大丈夫だつて判断になつたから、友達みたいに接してやれ」

「ユリー、キミはこの人の母親か何か？　あ、よろしくレトさん」「こちらこそ」

ハピが手を振つたので、こちらも振り返した。「レトさん」という呼び名は、少し気に入つた。

こうして、地下に新しい仲間ができた。地下にしかない情報網に

は、世界を救うためのヒントが引っかかっているかもしれない。ベレ
トはそう期待しながら、アビスの街へ続く通路を歩くのだった。

豎琴の節3 谷の盗賊、地下の盗賊

「『格闘王』の名が台無しだぜ、まつたく…」

地下の通路を歩きながら、バルタザールがぼやいた。

「なあベレト、お前レスターの出身か？」

「いや、そうではないと思うが…」

ジエラルトの日記には、ガルグ＝マクに居た頃に赤子が産まれたと書いてあつた。

「んじゃあ、『レスターの格闘王』の座はひとまず安泰つてここだな」「おまえはそれで良いのか、バルタザール？」

呆れたような顔でユーリスが聞き返す。

「いいや、そりやもちろん目指すは『フォードラの格闘王』さ。ちつとは名乗れるような二つ名を立てときやあ、びびつて逃げるような借金取りを追い返す手間がはぶけるつてもんよ」

「それ、絶対さつさと借金返したほうが早いし」

そんな話をしている間に、一行は先程の番人が居る角へ戻つてきた。番人が軽く手を上げて出迎えてくれる。

「やあ、あんた勝ったんですね。じゃあ、あんたは追い返さなくともいいんですね。正直俺じやあんたに勝てそうもないんで、良かつたですよ」

「おいおい、仮にも番人なんだからそんなんじやあ困るぜ。俺様が稽古でもつけてやろうか？」

「遠慮しとくよ。それに、バルタザールもこの騎士さんに負けたんだろ？」

「まあ…返す言葉もねえぜ」

番人とバルタザールの問答が一区切りついたところで、ユーリスが軽く咳払いをして注意を引き戻した。

「さあ、ベレト。こっちが、アビスの町だ。訳あって地上にいられねえ者たちが、助け合いながら暮らしてるんだ」

「そう、なのか…」

ベレトは、地下の町の様子に圧倒されていた。地上とも変わらない

ほど活気に満ち、子供たちが駆け回っている。しかし、来ている服は汚れて、繕つたあとも目立つ。生活の苦しさが伝わってくるが、助け合つて生きているのだと聞き、住民たちの絆も伝わってくる。

「大修道院の地下に、こんなに大きな町があつたとは…。すごいな」「だろ? まあ、ここに居るやつらを見ればわかるだろうが、住んでるのは一癖も二癖もあるやつばかりだがな」

入り口で呆気にとられていたベレトを促して、ユーリスが広い通りに出た。

「さて、あんたは大事な『客人』だ。俺様直々に、案内してやるよ。あんただけじや、地下のやつは怖がるだろうからな」

「怖がる、というと…」

「ああ、みんな地上のやつを怖がつてるんだ。地上から逃げてきたようやつが多いんだよ」

「そうか…」

地上の国どうしだけでなく、地上と地下の間の確執もどうにかしなければならないようだ。

「まあ、俺と居りや問題ないさ。たぶんな」

ユーリスは地下のいろいろなところを案内してくれた。地下の住民たちが集う酒場、地上では読めないような書物が収められた書庫、時々占星術師が現れるという部屋。ベレトは特に地下書庫に興味を持った。今までに知り得なかつた情報を見つけることができれば、目的の達成にも役立つと思つたからだ。時間を見つけてまた来ようと決めた。

そして、最後に紹介されたのが「灰狼の学級」の教室。

「俺たち『灰狼の学級』は、アビスで秘密裏に開かれた、第四の学級だ」「教団の枢機卿が一人、アルファルド様が、地上で行き場を失つた「元」士官学校生を助けるために設立されたのですわ!」

「第四の学級、か…」

「まあ、学級と言つたつて、必然的に、面白い奴かやべえ奴ばかりが集まつてるな。で、それをまとめて、実質的な級長みたいなのがユーリスだな」

その「やべえ奴」たちをまとめてあげるユーリスの手腕には感心せざるを得なかつた。アビスを案内されるうちに出会つた者の中には、明らかにごろつきという感じの者もいたが、大きな争いは起こつていないうだつた。

「俺に案内できるのはだいたいこの辺りかね。これ以上の探索はおすすめしないぞ」

「ああ、ありがとう。おかげで、新しい世界を見ることができた」「そりや地上のもんから見りや新鮮かもしれないけどよ、ここはそんな大したところじゃねえ」

ベレトは、地下の様子とユーリスの人となりに、すっかり感心しきつっていた。ユーリスにこう言われても、ベレトには薄暗いアビスが輝いて見えていた。

「で、ベレトさんよ。アビスに入れてやつて、案内までしてやつたんだから…タダつてわけにはいかねえのは、わかるだろ？」

「…！ 悪いが、今は持ち合わせが…」

「そう身構えるなよ。金なんかじやねえ。ちつとばかし、手伝つてほしいことがあるんだよ。騎士であるあんたに、アビスを守つてもらいたいんだ」

「どうしたことか、このところ地上の者がアビスを襲つてくるのです。セイロス騎士がこの地下を守つているとなれば、賊も手を出しにくくなると思いましたの」

コンスタンツエの説明を聞き、納得する。地下でしか暮らせないような弱い者たちを、さらに虐げようとするなど、放つておくことはできない。

「暇なときだけでいい。引き受けちゃくれねえか？」

「もちろんだ。全力を尽くそう」

「あんたらそう言つてくれると信じてたぜ」

もう一度、ユーリスと握手を交わす。

「じゃ、ハピの出番減らせるよね。助かつたよレトさん」

「残念ながら、キツかつたどこがせいぜい普通になつたくらいだ。お前の出番は減らないぜ」

「あつそ。ため息出そう」

事あるごとにため息のことが持ち出されるのは気にかかるが、今はまだ理由をきかないことにした。もう少し、食事やお茶会を共にしてじっくりと親交を深めてからだ。

「これから、何度もここに来させてもらおうと思う。やりたいことがあるんだ」

――――

その言葉どおり、ベレトは騎士としての任務や鍛練の間をぬつてアビスを訪れた。明朝には赤き谷に向けて出発するという日の日暮れ時にも、ベレトは地下書庫にいた。読んでいるのは「フオドラーの虫大全」という本だが、その中身は教団が禁忌としたものの目録だった。「よう、調子はどうだ?」

階下から、張られた縄の下をくぐつてユーリスが現れた。

「あー、その本か。セイロス騎士のあんたからしちゃ、教団への忠誠心に関わるんじゃないか?」

「ああ、教団がこれまで隠してきたものの大きさに驚かされるな。ここに載っているものだつて、正しく使えばフオドラーの技術が大いに発展するはずだ。確かに危険性はあるが、教団は保守的だな」

自分の正体すら隠し続けていま大司教レアなら、この程度の隠し事は山ほどあるはずだ。ある程度譲歩するよう説得することが、戦争を止めることに近づく手段のひとつになり得るだろう。

「あんたもそう思うか? ……教団は、都合の悪いことは全部無かつたことにしようとするからな。今度の金鹿の課題だつてそうだ」

「……といふと?」

「いくら追われてるといつたつて、わざわざ教団の聖地に逃げ込む馬鹿は居ねえよ。俺の推測では、裏で動いてるもつとでかい計画の捨て駒にされた、つてどこかな

裏で動いている計画。炎帝エーテルガルトと、「闇に蠢く者たち」の計画だろ

か。

今までただの賊だと思つて気にかけていなかつたが、赤き谷の盗賊たちが、自分の使命に関わる重要な存在になるかも知れない。

「なるほど。その盗賊団について、なにか詳しく述べないか？　その『もつとでかい計画』について、調べられるかもしない」

「俺の情報網をなめんじゃねえぞ。これでもフォオドラ中に子分たちが居るんだ。いいか、よく聽けよ？」

盗賊団『鉄の王』の頭はコスタス。頭の回る男じやねえし、実力も士官学校生と良い勝負つてとこだ。そのくせ金のためには何だつてやる。この前も貴族子弟を暗殺しようとしたらしい」

ルミール村周辺での、夜営訓練の襲撃のことだろう。

「あまり良い印象は持てないな」

「おつと、まだ話は終わつてないぜ。…やつらがそこまで金に固執する理由はな、孤兎を養つてやつてるからなんだよ」

「…！」

初耳だった。課題出撃のあとは、すぐに生徒たちと共に帰還していたので知らなかつた。後の処理をしていた騎士たちに保護されたのだろうか。

「狙う相手も貴族ばかりで、貧しいやつは狙わない。だが、負け戦はない。不意討ちが『鉄の王』の基本戦法だ」

確かに、盗賊団からしてみれば安全に奇襲をかけたはずが、たまたま伝説の傭兵が近くの村にいたのでは敵わないだろう。

「そんな彼らが、わざわざセイロス騎士団を敵に回すようなことをするとは思えないな」

「そう、そこが明らかにおかしいのさ。たぶん、もうコスタスは自分の意志では動いちゃいない。金に目が眩んでやばい仕事を引き受けたか、誰かに脅されてるんだろうな」

「そうか。明日、彼らとよく話してみようと思う。…余裕があれば、だが」

「おう、頑張れよ。コスタスのことはどうでもいいが、孤兎たちの保護は全力でやれよ」

ベレトは、どうすればコスタスを説得できるかを考え始めていた。

――――――

そして、課題出撃の当日。ベレスたち金鹿の学級と、ベレトたちセ

イロス騎士団が、赤き谷の入り口に詰めていた。

「……が赤き谷か？ 別に赤くはないが……。まあいいや。さつさと始めようぜ、先生。賊は谷の奥に追い詰められてるようだ。事前の情報どおりで実に面白味がないが」

「……そうか。それなら、新しい情報でもやろうか？」

クロードの気を引く発言。これがベレトが立ててきた計画だ。

「なんだ、そりや面白そうだな。ベレトさん、新しい情報つてのは？」

「実は……この盗賊団は、孤児を保護しているらしい」

「……」

「あいつらが?!」

クロードだけでなく、近くで聞いていたベレスや他の生徒たちにも驚きがはしる。

「わざわざ教団に喧嘩売るなんて、子供を養う意識が低くないかね？」
「そう、そこが不自然なんだ」

クロードがいい具合に食いついてきた。

「……で、考えたんだが……。誰かに命令されて、仕方なくこんなところに行かされたのではないか、と俺は考えている」

「……盗賊団を操っているやつが、別にいるということ？」

「確かに、俺たちが出会ったルミール村の件のときだって、3つの国その後継ぎをまとめて始末したい誰かに動かされてたと考えりや、自然だな」

ベレスとクロードの推論は、完璧だ。

「だから、できれば……。盗賊を討伐せずに生け捕りにして、真の黒幕を突き止めたいと思うんだ。騎士団や教団の決定でもなく、ただ俺個人の希望ではあるが」

…さて、彼らはどう出るだろうか。

「裏で暗躍している黒幕を引っ張り出すことができれば、黒幕がこれから起こすかもしれない事件を防げるかも。わたしは、この案に賛成」

「俺もだ。最初に言つてた孤児たちも、盗賊とはいえ、育ての親が死んじまつたら辛いだろうしな」

「うんうん、きっと盗賊たちも戦うのはめんどくさいだろうし、なるべく戦わないようにしよ?」

「私も、女神様が降り立つたこの地で、血を流すのには抵抗があります……」

「裏で操る黒幕とやらが居るのなら、そちらを炙り出すほかあるまい」ベレスとクロード、他の生徒たちも賛同する。側で聞いていたセイロス教団兵の隊長も、賛同してくれた。

「ありがとうございます。俺ひとりの勝手な自己満足に付き合つてくださつて」

「なに、見えない敵の正体を探り、子供たちを救うとあらば、セイロス騎士として当然のことだ!」

これで、何かこの先に繋がる情報を得られるかもしない。期待を胸に抱きつつ、傭兵団の仲間たちとともに、ベレトも配置についた。

「さ、先生。ヒルシュクラッセ出撃の指示を出してくれ」

「うん。金鹿の学級ヒルシュクラッセ：出撃！」

「…クソッ！ 騎士団の奴らか？ こんなところまで追つてきやがつて…！」

「お頭、もう逃げましようよお！ 奴ら相手に勝てっこないですよお！」

「…馬鹿野郎、今更どこへ逃げるってんだ！ 死ぬのが怖くて盗賊やつてられるかよ！」

我ながら、良い台詞を言うもんだ。そう、死ぬのは怖くなどない。ガキを養うために別のガキを殺すような馬鹿には、お似合いの最後だ。

「…俺が死んだら、無駄な抵抗はやめてさつさと捕まれよ。義理のために死ぬまで戦うなんざ、騎士のやることだらうが。盗賊なら、泥水すすつても生き残りやがれ！」

「なら、お頭も一緒に投降しましようつて！ きっと、一緒に…」

「馬鹿野郎、俺が逃げたところで、どうせ騎士団の代わりにあの仮面の野郎が殺しにくる。俺が死ぬまでは、団ハーモニーことやつらの命令に縛られてんだ。頭の俺が死にや、お前たちは自由だ。…ガキどものことは、任

せる

「お頭…」

谷の向こうでは、最前線の盗賊たちが騎士団と戦闘を始めているのが見える。

「気合い入れろ！ 騎士団のやつらを迎撃するぞ！」

「へい！」

橋の上に布陣していた盗賊たちは、弓や魔法で弱ったところを叩く戦法で、撃破されていった。

「ひいつ…！ 命だけは助けてくれ！」

「民の暮らしを守るのが貴族の責務…。君たちも守るべき善良な民になるよう、改心したまえよ」

死なない程度に怪我をさせられた盗賊たちは、各自武器を捨て、投降していく。

「初めて本気で戦つたけどよお、オデ、わりと強えんじやねえか？」
「よしつ、戦える…！ わたしの鍛え方、間違つてなかつた！」

初めての模擬戦ではない戦いに、生徒たちは手応えを覚えているようだ。

「前回は不意を突かれちまつたが…ま、盗賊なんてこんなもんか。ところで先生、西側に裏道があるらしい。西側と正面で、二手に分かれりやあ、奥にいる敵を挟撃できるかもしれないぜ」

「確かに、普通の戦闘なら挟撃のほうが効果的だけど、今回は無駄な戦闘を避けたい。戦力はひとつにまとめよう」

「了解、先生」

ひとかたまりになつて進軍し、盗賊たちを次々と戦線離脱させることに成功した。が、いつまでも順調というわけにはいかなかつた。

死角から現れたアーチャーに陣形を崩され、間をすり抜けた盗賊たちが後衛の生徒たちに突撃したのだ。

「死ねえッ！」

「マリアンヌちゃん、危ない！」

まさにマリアンヌに斬りかかるとしていた盗賊を、ヒルダが斧で吹き飛ばした。すぐにリシテアの魔法が飛び、盗賊は動かなくなつ

た。もうひとりの盗賊も、イグナーツの矢が胸を貫いていた。

「後ろで見てるだけのつもりだつたのにー。マリアンヌちゃん、大丈夫?」

「は、はい…。でも、あの人は…?」

「うわ、すごい血…。助からない、かな…」

「そんな…。主よ…赦したまえ…。この者の魂を、救いたまえ…」

「…あんたたちの死は、無駄にはしませんから」

敵とはいえ、死者が出たことで、動搖が走る。

「ごめんなさい…。こうするしか…」

「謝る必要はないよ、イグナーツ。戦場では、何よりも自分の命を守ることが大事。そのためには、討ちたくない敵を討つことも、仕方がない」

やはり元傭兵、ベレスが教師らしく教える。

「今は違つたけれど、普通は全部、こうなんだ。…早く、慣れたほうが多い」

「そ、そう…ですよね。やつぱり、傭兵つて…すごいなあ」

「感心するようなものでもないよ」

「ま、仕方ないこつた。恨まれはしないはずさ」

危機を乗り越えたことで、生徒たちの心は成長し、仲間としての絆も生まれたようだ。お互に励まし合いながら、進軍を続けていく。

「…ありや、騎士団も混じってるが…士官学校のガキ供か? 騎士団

じやなくガキをぶつけてくるたあ、なめられたもんだな!」

谷の奥で待ち構えるコスタスは、舌打ちした。あの時仕留め損ねたガキをここで殺つてしまえば、あの仮面の野郎も文句はねえだろう。

「苦労も知らねえ貴族のガキどもが…。今度こそおとなしく死にやがれ!」

盗賊団「鉄の王」は、コスタスのほか数名を残して、大多数が既に投降していた。金鹿の学級の面々はコスタスが陣取る遺跡の周りを包囲していた。

「…自分が、頭を説得してくる。みんなは、ここで待つていてくれ」

「俺も行かせてくれよ。こういう奴らの手口なら心得てるぜ。それか

ら、もちろん先生も来るだろ?」

「いや、それは…。まあいい、来るといい」

正直、説得できる相手かは不安だった。ここはおとなしく2人の力を借りることにしよう。

「賊の頭コスタス、武器を捨てて投降しなさい!」

ベレスが呼びかける。

「てめえは、まさか…の間の傭兵か! 騎士団の連中と手を組んでやがったとはな!」

「今投降すれば命は助けてやれる。あんたも死にたくはないんじやないか?」

「へつ、ガキが説得か? 生憎、俺はもう死ぬ覚悟決めてんだ。何人道連れを増やせるか、つてとこだ」

今のところは説得に応じる様子は無さそうだが、こちらには切り札がある。

「思い残すことは無いんだな。…ここで、死んでもいいと?」

「ああ。てめえら騎士様みたいに、守るべきもんなんてのはねえぜ」

「それなら、ひとつ訊いておきたいことがある。面倒をみている孤児たちのことはどうする気だ?」

コスタスはしばらく黙り込んだ。

「…俺の知つたことじやねえ。ガキどもは俺の手下が面倒みるさ」

「本当にそれでいいのか? 子供たちは、育てくれた優しいコスタスさんが居なくなつて、悲しいだろうなあ?」

「どうせすぐ忘れちまうだろよ。覚えてて得なんてねえからな」

コスタスは頑なに投降しようとはしない。孤児たちの話題を出されても、せいぜい少し動搖した程度だつた。期待していた反応とはまったく違う。

「さあ、剣を抜きな。俺はいつでもめえらを叩つ斬る準備は出来るからな!」

コスタスはまた斧を構えている。目には、殺意が浮かんでいるようだ。

…仕方がない。話ならば、手下たちからも聞くことができるだろ

う。コスタスは、斬るしかないか。

ベレトは、腰の剣の柄に手をかけた…が、その手が押し止められた。
「まだ諦める時じゃないと思うぜ、ベレトさん。俺に任せてくれよ」

「クロード！」

「さっきも言ったように、俺はこういう奴らの手口を心得てる。あいつが何を考えてるのか、わかるぜ」

ベレトの右手を離し、クロードは前に進み出た。荒い息をしているコスタスに近づいていく。

「コスタス、あんた多分、戦いたくもないのに戦つてるよな。生にしがみつくなのが仕事のはずの盗賊が、自ら死に行くなんて、おかしいじゃないか？」

「苦労も知らねえ貴族のガキに、盗賊の何がわかるってんだ！」

「生憎、貴族には貴族の苦労があるんでね。まあ、俺の場合はそこらの貴族よりは平民寄りの苦労ではあるが…。ま、これでもあんたらに理解はあるつもりなんだ」

ベレトは、かつてクロードが言っていたことを思い出した。俺もぬくぬくと育ってきたわけじゃない。クロードの出自は、他の貴族とは明らかに違うらしい。

「へっ、そうかよ。だから何だつてんだ。俺が死なねえようになれるのかよ？」

「できるかもしれないぜ。あんたらを裏で操つて、最後には都合よく始末しようとしてる黒幕のほうを、先に処理しちまえばな」

「…！ あの仮面の野郎を、知つてんのか？」

「そういうのは、俺よりこっちの騎士さんのほうが詳しいと思うぜ。ベレトさん、『仮面の野郎』に心当たりはあるか？」

コスタスの言う『仮面の野郎』はおそらく炎帝のことだ。今のうちに炎帝の動きを掴んでおけば、戦争を起こすために行動を起こすのを防ぐことができるかもしれない。

「仮面に炎が描かれていて、このくらいの身長か？」

エーデルガルトの身長のあたりを、手で示してみせる。

「間違ひねえ、そいつだ！」

「なら、仮面の人物についての情報を出せば、情報料くらいなら支払える。ガルグ＝マクなら、身の安全も守れると思うが…」

「そうかよ。なら、俺は降伏する。てめえのとこのガキが言うとおり、俺は死にたかねえ。天下のセイロス騎士団なら、俺ひとり守るくらい容易いもんだろうしな」

そう言つて、コスタスは斧を捨てた。

「好きなようにしろ。処刑する以外なら、抵抗しねえよ」

「ああ。協力に感謝する」

手を挙げて、コスタスは投降した。

「あつ、出てきたよ！」

遺跡のそとで待つっていた他の生徒たちが、集まつてくる。

「ほう、本当に賊の頭を説得するとは…。お前はなかなかに弁論の才があるようだな、クロード」

「お褒めにあずかり光栄、ローレンツくん。さてみんな、大修道院に帰るぞ」

「はー、やつと帰れるー！ 汗かいちゃつたし、汚れちゃつたし、帰つたらまずは浴室かなー」

ガヤガヤと話しながら、生徒たちは帰還の準備を始めた。ベレスも生徒たちに囲まれ、遺跡の中でのことを話してやつてている。

「ベレト、いいか？」

セイロス教団兵の隊長だ。

「我々は盗賊団が保護していたという孤児たちを探してくる。投降した盗賊たちは、我々が後から輸送する。君たち傭兵団は生徒たちと共に修道院に戻り、今回の件について大司教様に報告するように」

「了解しました」

「帰還中も、生徒たちのことを守つてやるのだぞ」

もう全員がすっかり荷物をまとめ終わつた頃、クロードが話しかけてきた。

「なあベレトさん、先生を見なかつたか？」

「こちらには来ていない…」

「いつの間にか居なくなつててなあ。いつたいどこに…つて、あつち

に居るじゃないか。どうも、ベレトさん」

クロードの視線の先には、ザナドの景色をぼうつと見つめるベレスの姿があつた。

「先生？ 何してるんだ、こんなところで。無事に帰るまでが課題だろ？」

クロードがベレスを呼んで戻ってきた。ベレスも、なにやら首をひねりながら後をついてくる。

かつて女神ソテイスが暮らしていたという谷の景色は、ソテイスの記憶が教えてくれた。だが、なぜザナドが赤き谷と呼ばれているか、ということはソテイスも知らなかつたようだ。何度ここを訪れても、それを思い出すことはできていない。

「ベレト、どうした？」

考えに耽つっていたので、ベレスとクロードに話しかけられて驚いた。

「いや、何でもない。…良い場所だな、と改めて思つて、見ていた」「うーん…先生といいあんたといい、この谷はそんなに魅力的かねえ。俺にはわからぬいけどなあ。まあいい、修道院に戻つたら、我らが初めての課題達成を祝つて宴でもするか」

「おいクロード、課題の達成くらいでいちいち宴を催していくは、月に一度は宴を開くことになるぞ」

「ははっ、宴はそのくらいが適量さ！」

生徒たちの騒がしさは、その中に居ると心が落ち着く。生徒たちに囲まれるベレスを見て、ベレトも教師だった頃が懐かしくなつてきていた。

――――――

「盗賊を討伐ではなく、生かしたまま捕らえることができたのですね。ザナドの地を再び血に染めることがなかつたのは、喜ばしいことですね」

ベレトは盗賊団のことを、ベレスは課題の成果を報告するため、謁見の間に来て いた。

「なぜ彼らが生徒たちを狙つたのか…背後にあるものを調べねばなり

ません。ベレト、捕らえた賊の頭に対して、ザナド侵入の背景を聞き出すことを命じましょう。彼らは騎士寮裏の牢へ収監されるはずです

す

「わかりました」

牢の存在は聞いたことがあつたが、実際に見たことはなかつた。教師をやつていると、生徒立ち入り禁止の騎士寮方面にはあまり行く用がないのだ。

「それから、盗賊団は孤児を集めて養っていたようです。子供たちも騎士団が保護して、大修道院へ連れ帰る手はずになつています」

「本当に、多くの命を救つたのですね。あなたの働きに感謝します」

「はい。報告は以上です」

報告を終え、ベレトは謁見の間を後にした。

騎士寮に戻ろうと歩いていると、セテスが向こうからやつて來た。「やあ、君がベレトという騎士だな。ザナドでは、懸命な判断をしてくれたと聞く。私からも礼を言おう」

「いえ、無駄な血を流したくはありませんからね」

「ほう、そうした理想を掲げた者は多くいたが、ここまでやり遂げた者は、私もあまり知らないな」

自分だけでなく、他の騎士や金鹿の皆が協力してくれたおかげである。

「ところで、セテスさんはどちらへ？」

「ああ、私はな、盗賊団のところの孤児たちについて大司教と相談しようと思つてな。盗賊たちの懲役期間が終われば、また共に暮らさせてやることも考えているのだ」

「そのほうが、子供たちも嬉しいでしょうね」

「君もそう思うか。では、私は行くとしよう」

セテスの後ろ姿を見送りながら、ベレトは孤児たちのことを思つた。親代わりだつた盗賊たちが自分たちに殺されていた世界では、彼らはまた寂しい生活に戻らざるを得なかつた。もしかすると、親代わりを殺した騎士団や生徒たちに復讐心を抱くことがあつたかもしない。

結果的に、ということではあるが、小さな平和を生んだことに気づいたベレトは、少し嬉しい気持ちで外に出た。

花冠の節1 暗雲の兆し

花冠の節、1の日。牢に囚われたコスタスに話をきくため、ベレトはいつもより少し早く起きた。服を着替え、泉から引かれた冷たい水で顔を洗う。空はよく晴れ渡つていて、清々しい朝だつた。

「おはよう！ 今日は早いのだな」

日課だという走り込みの最中らしいアロイスが、元気な挨拶をくれた。

「おはようございます。今日はちよつと、捕虜牢のほうへ用があつて…」

「ああ、先日貴殿らと金鹿の生徒たちが捕られた賊の尋問だな？ 牢へ行くのなら、注意を怠らぬようにな」

「はい、捕らえられているとはいえ、もとは賊ですからね」「ああいや、確かにそれもそうだが、実はな…」

ここでアロイスは急に声を落とした。

「あの牢獄には、『出る』らしいのだ…」「出る、というと？」

「牢の中で果てた罪人の靈が、無念のままにこの世に留まり、悲痛な叫びをあげる、と。どうにも恐ろしくて夜も眠れん…ということもないが、気にかかるのは確かだ」

そういうえば、アロイスは幽靈の類いが苦手だった。

「なるほど…。靈にも気をつけておきましよう」

「ああ。では、頑張つてくるのだぞ」

そう言つて歩きかけたその時、どこからともなく恐ろしげな叫びが響いた…。

先ほど聞いた話のせいで、特段幽靈などが苦手ではないベレトも、さすがに少し鳥肌がたつのを感じた。アロイスはといふと、若干腰が抜けかけ、青い顔で辺りを見回している。

「いいいい今のは…いや、ままさか、な…」

「牢のほうから、ですね。行つてみましよう」

「わ、私もか…？ …いや、私も…騎士だからな。覚悟を、決めるぞ…」

！」

牢まで駆けつけた2人は、ベレトを前にして通路を進んでいった。

足音を聞きつけたのか、奥から「早く来てくれ！」と呼ぶ声もある。

そして、盗賊団「鉄の王」の面々が収容されている牢屋の前へたどり着いた。恐怖の表情を浮かべた盗賊がひとり、鉄格子に貼り付いていた。

「あつ、あんた、お頭を助けてくれた騎士さんだよな！　お頭が、大変なんだ！　助けてくれ！」

「さつき叫んだのは、君か？」

「そ、そうだ。お頭が、お頭が……！」

その焦燥した様子に、脱走はしないだろうと判断して、牢屋の鍵を開き中に入る。盗賊たちの人垣^垣がさつと割れた先に見えたのは、寝台の上で眠っているようなコスタスだつた。

寝台のわきにかがみこみ、そつとコスタスの手首に触れる。：脈はなかつた。

「…アロイスさん、セテスさんへ報告をお願いします。盗賊の頭が急死した、と…」

「あ、ああ。わかつた」

アロイスは青い顔のまま、走つていった。

「あまりわからぬ、わね」

1時間ほど経ち、牢屋の中にはベレト、アロイス、セテスにマヌエラが揃つていた。マヌエラがコスタスの死体を検屍した末に発した言葉である。

「武器で斬られた傷も、黒魔法の痕跡も、新しいものは無いわね。持病もなし、毒物も出ないし、攻撃の白魔法か闇魔法を受けたのかしら」「他の賊たちは、夜の間は何も見なかつたと話しております。注意深い盗賊たちが気付かないのだから、派手な白魔法ではなさそうですね」

幽霊でないとわかつてからは、アロイスもある程度冷静になつていいたが、顔色はすぐれないままだ。何の思い入れもない賊の頭とはいえ、人が1人殺されたのだから、当然だろう。

「ふむ、成る程…。マヌエラ、朝からご苦労だつた」

「闇魔法の使い手で、かつこのガルグ＝マクに居る者となると、かなり絞られるのでは？」

「だが、巡礼者などに紛れて闇の魔道士が出入りしていても、気付くことは難しいだろう。それに、初級魔法のドーラ△くらいなら、使える者も少なくはない」

ベレトとしては書庫番のトマシユに成り替わっている闇の魔道士ソロンを怪しんでいたが、トマシユの正体がわかつていない今は、誰も理解を示さないだろう。

「他の盗賊の中に何か知っている者が居るかもしません。彼らにもつと話を聞いてみましよう」

隣の牢屋に移されていた盗賊たちは、皆打ち沈んだ顔をしていた。「君たちの頭は、何者かによつて殺されたようだ。なにか、心当たりはないかね？」

「…俺たちは盗賊だ。恨みなら、いくらでも買つてるさ」

「命を救つてもらつた俺たちやガキたちにとつちや、コスタスの旦那は英雄だつた。でも他のやつから見りや、ただの薄汚い賊だからな」盗賊たちは、心当たりがないというよりは、心当たりがありすぎてどれかわからないという様子だ。

「オ、オレ…心当たりがあります！」

そう言つて手を挙げたのは、少し氣の弱そうな盗賊だ。

「お頭は、騎士団に追い詰められたときに、こう言つてたんです。逃げたところで、騎士団の代わりに仮面の野郎が殺しに来る、つて…。お頭は、そいつに殺されたんじや…？」

「確かに、コスタスが投降した時に話していた、生徒を襲うよう依頼した人物は、仮面を着けていた。炎の紋様が入つた仮面を着けた、小柄な人物とのことでした」

ベレトも補足説明をする。

「なるほど…それは有り得るな。騎士団に、謎の仮面の人物について調べさせよう」

それからしばらく話を聞き、ベレトたちが牢屋を離れようとした

時、ひとりの盗賊が言つた。

「…どうか、お頭の敵を討つてくれ。…頼む」

「ああ、約束しよう」

盗賊たちに向かつて強く領き、ベレトは牢を後にした。

— — —

コスタスが謎の死を遂げてから、1週間が経つた。犯人の捜索は進展もなかつたが、ベレトには目下解決すべき問題がもうひとつあつた。それは、今節の課題で討伐されることになるロナート卿、彼の命を救うことだ。

ロナート卿の一隊は、霧の中でセイロス騎士団の包囲をすり抜けてしまつたため、混乱の中で討たれこととなつた。もし予定どおり捕縛されていたら、大司教暗殺の件などについての詳しい尋問などもできるようになるだろう。そうすれば、その裏に潜むソロンたちにも近づけるかもしれない。

：それと、アツシユの心の傷が深くならないことだ。今、ベレトの視線の先には、大聖堂のベンチに腰かけ床を見つめるアツシユがいた。

「…ベレト？」

突然名前を呼ばれて驚いて振り向くと、ベレスがそこにいた。
「ベレスか、考え方をしていて気づかなかつた。こんなことでは、奇襲を防げないな」

そうは言つたものの、自分やベレスは傭兵時代からの癖で、普段から足音を消しているらしい。こちらが奇襲するぶんには良いのだが。「それはそうと、もう聞いていると思うけれど、今節の課題はロナート卿の反乱の鎮圧だ。それで、ひとつ伝えておきたいことがある」「もしかして、アツシユのこと？」

「そうだ。ロナート卿は、アツシユの父親のような存在だからな。もし直接戦うことになつたとしても、討たずに説得してみてほしい」「努力はする」

ベレスは頷いてくれた。

「それから、『課題協力』という仕組みがある。それで、課題出撃にアツ

シユを同行させてみると良いと思う。説得の助けになつてくれるはずだ」

「わかつた。 そうしてみよう」

それからベレスがアツシユの元へ向かうのを見送った。

不安そうな表情のアツシユに、ベレスが語りかけている。

「君自身が説得してくれれば、ロナート卿も、討たれる前にあきらめてくれるかもしだい。一緒に来てくれないかな？」

「僕で、力になれるなら…。ぜひ、やらせてください！」

「ありがとう、アツシユ」

「そんな、お礼を言うのは僕のほうです。絶対に、ロナート様を止めてみせます…！」

アツシユはまだ不安そうだつたが、少し希望の光が見えたようだ。アツシユのことは、ベレスに任せておくことにした。

大聖堂を後にしたベレトは、アビスを訪れた。

「ベレトさん、お疲れさんです。ここは本日も異常ありますよ。ここじゃ異常ありが日常なんで、異常ありで異常なし、なんですけどね」アビスの番人が、いつもどおり緩く話しかけてくる。

「あんた、よくアビスに来ますよね。宝探しでもしてるんですか？ 確かに地上にはないお宝があるかもしませんけど。あんたにとつてのお宝が何なのか、俺にはわかりませんけどね」

「探しに来た宝物：情報、だろうか。ここには、地上では絶対に見つからない情報がごろごろある」

「確かに、書庫にあるのは禁書みたいなもんばっかりだし、ユーリスはすごい情報通ですしね。なんか知りたい情報がありや、ユーリスに聞くといいですよ」

言われるまでもなく、ベレトはユーリスを訪ねてきていた。

「おう、あんたか。ロナート卿が反乱を起したんだつて？ いずれこうなるだろとは思つてたよ。その兆しみたいなのはあつたんですね。むしろ今までよく蜂起しなかつた、つてくらいだ」

「兆し、とは？」

「うーん、騎士のあんたになら教えてもいいか。事のそもそももの発端

は…つて、何か聞こえねえか?」

確かに、かなり急いだ足音らしき物音が聞こえる。どうもこちらへ向かってくるようだ。

通路の曲がり角から姿を見せたのは、コンスタンツエだ。息を切らしている。

「ユーリス! やーっと見つけましたわ! 私に、はあ…捜し回らせて…はあ…」

「いや知らねえよ…。まあ落ち着けって、日陰女」

「日陰女!? 私の一番気にしていることを! 今日という今日は消し飛ばし…」

コンスタンツエは慌てて咳払いした。

「で、何の用だ? 一刻を争う事態なんだろうな」

「そ、そうですわ。それと言うのも皆の個人的な情報が記された裏名簿が賊に盗まれたのです」

「名簿? そんなもんアビスにあつたか?」

「ありますわよ!」

ユーリスはあまりピンと来ない様子だ。ベレトも、士官学校の名簿以外にそんなものがあるとは初耳だ。

「ともかく! そんなものが世に出回つたら一大事。即刻、取り返すべきではありませんこと?」

「その名簿ってやつは、世に出回つたら一大事な内容なのかよ? 個人的に内容が気になるつて理由で良けりや、協力するぜ。ベレト、あんたも一緒にどうだ?」

これはまたとない好機だ。その名簿に、何か有益な情報が載つてたりするかもしれない。

「自分も内容が気になるな」

「いや、そういうことじや…。まあ、とりあえず協力はしてくれるんだよな?」

「そうと決まれば、早速賊を追いますわよ。こちらですわ!」

コンスタンツエは駆けて行こうとしたが、その背中をユーリスが引き留めた。

「落ち着け。騎士もいるとはいえたつた3人で賊の一昧を相手する気かよ。相手の人数にもよるが、あと2人くらいは欲しいところだな」

「た、確かにそうですわね…」

「協力してくれそうな人をもう少し探そう」

今度は、3人揃つて出発した。

花冠の節2 裏に潜むもの

「ねえ、なんでわざわざハピまで呼んだわけ？ ユリーコニーにバルトが揃つて、おまけにレトさんまで居たら大丈夫でしょ」

「少なくて困るよりは多くて困るほうが良いだろ。金だつてそうだ。多くて困るなんてなかなかに贅沢なもんだ……」

「お金とハピと一緒にしないでよ。そつちが困らなくても、ハピは困るし」

結局バルタザールとハピを加えて、5人で盗賊団の拠点を目指すことになった。

「……ところで、その名簿つてのは、盗まれると何かまずいのか？」
「まずいどころの騒ぎではありませんわ！ あれには私たちの情報が満載…。皆の氏名や出身地、性格はもちろん、少し恥ずかしい秘密まで……」

「少し恥ずかしい秘密!? なんだよそりや!!」

コンスタンツエの発言に、4人は驚くばかりである。「少し恥ずかしい秘密」なら、ベレトが最初に思つたよりも情報の価値はなさそうだが……。世界を救うためというよりは、純粹な好奇心で名簿に興味が出てきた。

「そうですわね……。私が以前確認した時は、ハピは大修道院内で最も多く、猫に逃げられた旨が書いてありましたわ」

「えつ！ そんなの、いつ見てたの!?」

ハピがびっくりして思わず足を止める。

「え、えつと……。内容はともかく、ハピたちの情報が敵に漏れるのはまずいし。コニーの言う通り、すぐ取り返さないとね」

「やつとハピもやる気になつたか。んじゃ、行くぜ」

一行は地下通路の終わりにたどり着いた。外の光が差し込んできている。外に出ると、陽光がまぶしい。

ユーリスたちも外に出てきたが、コンスタンツエの姿だけが見当たらない。振り返っていると、コンスタンツエは通路の出口で立ちすくんでいた。

「どうしたんだ、コンスタンツエ？」

「あー、気にするな。あいつが地下から出れねえ理由のせいだな」

コンスタンツエが外に出られない理由とは、何なのだろう？　コン

スタンツエは、まだ通路の中にいる。

「……おーい、どうせ外には出なくちゃいけねえんだ、諦めろ」

「……ああつ、もう！　そちらに行けば良いのでしよう!?　行けば！」

「……」

コンスタンツエは、黙り込んでいる。ベレトのほうを見たコンスタンツエは、なんとなくマリアンヌを思い起こすような影のある顔をしていた。

「ああ、怪訝な顔をされておりますわね……。私の不可解な体質のせいで、貴方様には無駄な悩み事をさせてしまいましたわ。この命をもつてお詫びいたします……」

見た目だけでなく、性格まで豹変してしまっているようだ。

「……これは、いつたい？」

「陽に当たると、こーなるんだって。だからコニーは地下に籠もつてるわけ。……ほら元気出して、コニー」

「お前しか賊の居場所は知らねえんだ。要するに、お前が必要なんだよ」

「ああ、私などには勿体ないお言葉。そうおっしゃるのでしたら、私はあなた方を案内する仕事に徹するしかありませんわ。さ、こちらですわ……」

ひととおり喋りきるとコンスタンツエは黙り込み、そのままスタッタと歩き始めた。

一行は、ガルグ＝マクの郊外にある、使われていない古い砦にやつて來た。

「ここが賊徒の根城であるはずですわ。私などの推論に従うのが最良の選択とは思えませんが……」

「いや、ここで良いだろ。中を調べるぞ」

ユーリスを先頭に、中へ突入する。ユーリスは見張りらしき男を華麗な剣技で圧倒し、あつという間に喉元に剣を突きつけていた。

「ひいいつ！」

「情報を吐け。そうすりや命は助けてやる。ここに居るのは何人だ？」

「い、今は俺1人だ。お頭たちは盗みに出てる？」

「盗品の隠し場所は何処だ？」

「あつちの、奥の部屋だ！」

「そうか。じゃ、これでお前は用済みだ。何処にでも行けよ」

ユーリスがおまけでもう一度腰を蹴り飛ばしてやると、見張りの賊は逃げていった。

その言葉に従つて奥の部屋に進むと、盗品や金が並べられていた。

「これが、その名簿ですわね」

いつの間にか元の性格に戻つていたコンスタンツエが、積まれた書物の間から名簿を取り出した。

「他のものも、きつとどこの町からの盗品ですわね。これも全て取り返しておいたほうが……」

「馬鹿、こんな量全部持てるかよ。ベレトさん、また後で騎士団と一緒に制圧してくれないか？ 賊の頭が居るときにな」

「頼まれた」

民の暮らしの安寧を脅かす盗賊団とあれば、騎士団の出撃も許可されるだろう。とりあえず名簿だけを持ち、ベレトたちは盗賊団の根城を出た。

「早く大修道院に……」

「おいてめえら、待ちやがれ！」

突然怒鳴り声に呼び止められた。声のしたほうを見ると、盗賊団が戻つてきていた。

「俺たちのお宝を横取りしようつたつて、そうはいかねえ……。全員、ぶつ殺してやらあ！」

「時間かけすぎだし。面倒なことになつちやつたじやん」

「いや、見ろ」

ユーリスが指差した男は、さつき逃がした見張り番だつた。

「あいつが頭に知らせたんだろうな」

「くそつ、ぶちのめしとくべきだつたか……？」

「これまでの行動に反省は尽きませんが、今はまず身を護ることを考えましょう」

そう言っている間にも、賊たちは迫つてくる。

「あいつらを全滅させるぞ！」

「おう！」

ユーリスの言葉に、とつぐに臨戦態勢だつたバルタザールが応える。

「自分とユーリスとバルタザールで、前衛を張る。コンスタンツエとハピは、魔法で援護してくれ！」

久しぶりに指揮をとつて、ベレトは少し教師時代を思い出していた。元より実力十分な灰狼の学級の生徒たちは、ベレトの指揮により生き生きとした戦いを見させてくれた。

「俺の頭じゃあ、こんな戦法は思い付かないな！」

賊の顔面に拳を叩き込みつつ、バルタザールが言う。

あつという間に盗賊団は壊滅し、最後に残つた盗賊頭がユーリスに斬られて倒れた。

「ぐああつ！」

「場数が違うんだよ。俺を誰だと思つてやがる」

足元の盗賊頭に目線を合わせるように、ユーリスがかがみこんだ。「さて、交渉の時間だ。俺は”狼の牙”つて組織の頭だ。盗賊やつてりや聞いたことくらいはあるよな？ ここで死ぬか、俺の子分につか。どつちにする？」

「……俺はてめえに負けた。好きなようにしろ」

「じゃあ決まりだ。正直、殺しは趣味じゃないんでね。ガルグ＝マクのアビスで待つてるから、好きなときには来な。うし、帰ろうぜ」

ユーリスがさつと立ち上がり、仲間のほうを振り向く。

「見事な説得だつた」

「その顔、ロナート卿の説得に使えるとでも思つたか？ 残念だが、こいつは賊どうしでしか通用しないぜ」

今節の末にロナート卿との決戦を控えたベレトは、ひとつでも多く

ロナート卿を生き残らせる方法を考えておきたかった。

「そういうや、あんたにロナート卿について話そうとしてたんだつたな。アビスに戻つたら色々話してやるよ」

アビスに戻り、コンスタンツエも元気を取り戻すと、ベレトはまずつと気になつていたことを尋ねた。

「その名簿は、いつたい誰が書いたんだ？」

「ああ、それは……」

コンスタンツエはそう言いかけて、地下酒場の扉を開けた。

「こちらにいらっしゃいますわ」

中に入ると、奥の椅子に座っていた男がこちらに気づいた。

「おお、名簿を取り返してくれたのか。これはありがたい」

「この人は？」

「この人はやらかして士官学校を追放された元教師さ。教師としての能力には定評があつたらしいぜ」

ベレトやベレスにとつては、先輩教師にあたる人らしい。

「教師を辞めてからも、どうも人の成長を見守るのが趣味になつてしまつていてね。こうして、今の生徒も名簿にまとめているというわけです。……そうだ、君は確かジエラルト傭兵団の一員だつたかな」

「そうです。それで、どうかしましたか？」

「新任教師は、ジエラルト殿の娘だそうじやないか。この名簿を、その新任教師に渡してやつてくれないか。きっと教導の役に立つ」

確かに、ベレトも始めのこの頃は、右も左もわからないような教師生活を送つていた。情報満載のこの名簿があれば、どんなに生徒と親しくなるのが容易になるだろうか。

「なるほど……！ それは良い考えですね」

「見ず知らずの私が出る幕ではないからな。君から渡してくれるとありがたい。受け取ってくれ」

男から名簿を受け取つたベレトは、ベレスに渡す前に自分も一読しようと決めた。

「ほう、良いもん貰つたじやねえか。んじゃ、ロナート卿の話をしてもやるから、こつちに来いよ」

ユーリスに呼びかけられ、男に感謝を込めて一礼してから地下酒場を出た。

「んで……なんだつたか？ そうそう、ロナート卿の反乱の兆しがどうたらつて話だな」

灰狼の教室のベンチに落ち着き、ユーリスが話し始める。

「あんた、『ダスカーの悲劇』は知つてるよな？」

「ああ。知り合いを喪つた人とも、よく関わっていたから」

ファーガスの国王一行が、ダスカーで暗殺された事件だ。そのファーガス王というのは、言うまでもなくディミトリの父ランベル。亡くなつた騎士たちの中には、フェリクスの兄でイングリットの婚約者であるグレンもいた。また、事件の後には報復として、ドウドゥーの同胞であるダスカー人たちが逆殺された。青獅子の学級の生徒の多くに、現在まで影を落とし続ける事件だ。

「それで、教団はその『ダスカーの悲劇』に関わつた廉で、ロナート卿の倅のクリストフを処刑したんだ。これくらいなら、あんたも知つてるだろ？」

確かに、関係者であるアツシユやカトリーヌから、ある程度の話は聞いていた。

「で、ロナート卿はそれを冤罪だと思つてる。本当に冤罪なのかもしない。真偽はどうあれ、それでロナート卿は教団に恨みを持つてゐわけだ」

「それは……そうだろうな」「そんなこと知つてる、みたいな顔すんじやねえよ。本題はここからだぜ？」

ユーリスに真剣な顔で言われ、ベレトは思わず座り直した。

「クリストフの処刑は、もう4年前の話だ。そこからずつとロナート卿は教団への復讐心をくすぐらせてきたわけだが……最近になつて、西方教会がどうもそれを後押ししてゐらしい」

「西方教会は、ここ数年中央教会との対立を深めているんだつたな？」アビスの書庫で読み漁つた書物のひとつに、そう書いてあつたおぼえがある。

「そうだ。西方教会にしちゃ、中央教会に対抗する仲間としてちょうど良かつたわけだ。そこで問題なのは、西方教会のとある噂だ」

「噂？」

もつとよく話を聞こうと、ベレトは身を乗り出した。

「ああ。西方教会に、妙な魔道士が干渉してゐるって噂さ」

これは、ソロンやクロニエのような「闇に蠢く者たち」のことだろう。ベレト自身も、マグドレド街道脇の森で、霧を発生させている闇魔道士と戦つたことを覚えていた。

「やつぱり、心当たりがありそうな顔だな。何しろ、この闇魔道士たちの噂はたくさんあるからな。いくつか表に出てても不思議じやねえ。フリュム家の反乱だつたり、七貴族の変だつたりみたいな、反乱が起ころる時には必ずと言つていいほど謎の闇魔道士の話が出てくる。もつと大昔まで遡れば、王国の独立戦争の時代にもあつた。軍師パーンが……いや、この話は置いとこう。

と、まあ、この闇魔道士たちが、フォドラを混乱させようと裏から煽動してるのはほぼ間違いねえだろう。そんな奴らが西方教会とガスパー城に入つたということは、そろそろ反乱が起きるつてことだらうな。

……つてのが、俺が言う兆しだ。もちろん裏で操る闇魔道士は噂にすぎないし、確証はねえがな」

話し終えたユーリスは、深く息をついてベレトを見た。

「……話してくれて、助かつた。ありがとう」

「参考になりや良いがな。じゃ、月末は頑張つてくれよ」

花冠の節3 霧中の調和

「霧が出るかもしれないな。たいまつを買つておこう。」「さすがにこの時期に霧はないんじやないか？」

「いや、なんとなくそんな気がするんだ。」

マグドレド街道への出撃前夜。出撃準備中にガープと交わした会話だ。

ロナート卿との戦いでは、魔道士が霧を発生させていた。視界が狭まつては、不都合なことが多い。霧に紛れて襲つてくる民兵を殺してしまわないように、細心の注意を払わなくてはいけない。

マグドレド街道には、やはり霧がたちこめていた。

「報告！ 敵が接近中です！ 避けられません！ 敵の兵力が予想以上に多く、霧のせいで騎士団の包囲をすり抜けてきます！」

「おつと……ベレス、任務変更だ。総員、戦闘準備にかかりツ！」

カトリーヌがベレスと生徒たちに檄をとばすのが聞こえる。

「こう霧が濃くちや、どこにどれだけ敵がいるんだか把握できないね。」

「カトリーヌさん、たいまつを用意してあります。何人かの生徒に持たせておけば、視界が確保できるはずです。」

「おっ、気が利くねえ。」

たいまつに明かりを灯すと、一気に視界が広がる。霧の中から奇襲

をかけようとしていた民兵たちが、後退していくのが見えた。

「セイロス騎士団とともにやつても、おらたちじや無理だあ！」

「くつ……ひとまず撤退だ！ 態勢を立て直せ！」

「まさか街のみんなまで戦場に……!? ロナート様は、どうしてこんな……！」

その民兵たちの声を耳にして、アッシュが動搖した声をあげる。ベ

レトは、カトリーヌに声をかけた。

「反乱に参加したとはいえ、ほとんどは民兵です。なるべく命を奪わないよう心がけて進軍するのが良いかもせん。」

「へえ、アタンにはそんな発想なかつたよ。リア様に敵対しようとする

る者はみんなぶつ倒すのがアタシの流儀だつたからさ。」

そう言つてカトリーヌは、霧の奥に目を向けた。昔を思い出すかのように、ゆっくりと話し始める。

「そもそもこの反乱だつて、もしあの時のアタシが、ぶつ倒す以外の選択をしてりやあ……。……いや、アンタにするような話でもなかつたな、忘れてくれ。」

大きく息をついて、首を横に振る。

「とにかく、血を流さずに終わられればそれに越したことはないよな。こつちでも最大限努力はするよ。」

「お願いします、カトリーヌさん。」

これでカトリーヌたちが民兵を倒してしまることは防げるだろう。マグドレド街道での戦闘では、カトリーヌ隊が先行してほとんどの敵を倒していたような記憶がある。カトリーヌの過去の出来事が、偶然助けになつたようだつた。

「さあ、進むよ！ 口ナート卿の目を覚まさせて、戦いを終わらせるんだ！」

それからの戦いは、前節の赤き谷と同じように、ゆっくりと進んだ。しかも今回の敵のほとんどは民兵で、戦闘に慣れている者も少なく、不意打ちを受けて混乱するというようなこともなかつた。そしてそのまま、何事もなく魔道士が隠れている森まで進軍できた。

「口ナート様には近づかせぬ……！」

ガスパール兵長が森の中から現れる。改めて見ると、彼の装束は聖墓の襲撃・ルミール村事件・禁じられた森などの際に現れたソロンらの仲間の魔道士と同じものだと気づいた。

「正規兵なら斬つても問題ないよな。……いや、それとも生け捕りにして尋問でもするかい？」

「そうですね。この反乱には、不可解なことが多すぎる。できれば情報を得たいところですね。」

「なら、そいつで決まりだ。死なない程度にブチのめしてやるよ！」

その一声とともに、雷霆が一閃。一瞬のうちに勝負は決した。

ガスパール兵長が昏倒するのと同時に、彼の魔道で発生していた霧

が晴れてゆく。霧の向こうから、ロナート卿の姿が現われた。

「カサンドラ……雷獄のカサンドラ！ 我が息子を裏切つた狂信者め！」

カトリーヌの姿を見据え、恨みの籠もつた声をあげる。

「……アタシの名はカトリーヌだ。」

カトリーヌも、ロナート卿に強烈な視線を返しつつ、言い返す。

「女神の僕たるセイロス騎士団の剣、その身で味わいな！」

「霧は晴れても、我が息子の無念は晴れぬ！ 腐った中央教会に、主の裁きを……!!」

ロナート卿の周囲には、正規兵も民兵も、多くの兵士が集っていた。「焦らず戦おう。倒すにしろ、説得するにしろ、この状況で無理はできない。」

ベレスが生徒たちに呼びかける。

「こうも入り混じつてちゃ、民兵を手にかけないというのもなかなか難しいんじやないか？ 多少の犠牲は覚悟して全力でかかろうよ。」「敵が密集しているので、計略でまとめて揺さぶれるかもしれません。あちらからの攻撃を制限できれば、敵を攻撃せずとも進軍できるんじゃないでしょうか。」

「イグナーツ、良い着眼点だ。計略で民兵たちを足止めして、その隙に一気に進軍しよう。」

「そういうことなら備えは万全だ。騎士団、突撃用意！」

「俺も手を貸すぜ。弓兵隊、準備はいいな？」

クロードの号令に合わせて、無数の矢が一斉に放たれる。さらに、ローレンツの配備した騎士団が敵陣を攪乱する。

「うわああっ！」

突然の攻撃に、民兵たちは大きく動搖した。これなら攻撃される心配もないだろう。

「よし、今の内に進軍しよう。」

ベレスを先頭に、他の生徒たちは敵陣の横をすり抜け進軍していく。

「アツシユ、君も一緒に。……まだ、説得の余地は残っているはずだ。」

「そう……ですね。でも、ロナート様が僕の話に耳を傾けてくれるかどうか……。」

「今は信じることしかできない。だが、やつてみなければ分からぬ、だろう?」

「……はい!」

まだ迷いを捨てきれない様子だつたアツシユに声をかけてやると、彼は強い意志の宿つた瞳をあげた。そして、ロナート卿の待ち構える街道の奥へと駆けていく。

「アツシユ……そこをどくのだ。わしは悪鬼どもを討たねばならん! 必ず!」

ロナート卿はこちらの陣営の中に目ざとくアツシユを見つけ、強い語氣で諭そととする。

「ロナート様……もうおやめください! なぜ、こんな無謀な振る舞いを……!」

「レアは民を欺き、主を冒涜する背信の徒だ! 大義は我らにあり、主の加護も我らにある!」

「だからって、こんなことは間違っています! 街の人たちまで動員するなんて!」

「……ならば遠慮なく、刃をわしに向けよ! わしはもう、後には引けぬのだ……!」

アツシユの必死の説得にも、ロナート卿は耳を貸さない。アツシユがその気概を受け継いだように、ロナート卿にもまた強い意志で正義を貫いているのだ。……しかし、このままでは今までと同じにロナート卿を討つことになつてしまふ。何を言つたらロナート卿を説得できるだろうか?」

「ロナート卿、話を聞いてください!」

「お前もあるの女狐に誑かされているのか……。わしが真実を知らしめてやるしかない!」

ロナート卿が説得に応じる気配は見えないどころか、完全に敵意をもつて武器を用意している。

(他にすべはない、か……?)

何も説得の言葉を思いつけないまま、ベレトも剣を構えた。しかし
その時、ロナート卿はベレトの背後のカトリースに注意を移した。

「貴様だけは、貴様だけはこのわしが……！」

「アンタは正義を、すっかり見失つちまつたんだな。」

カトリースが呟いた、正義を見失つたという言葉がどうも引っか
かつた。かつてのロナート卿は、どんな正義を見据えていたのだろう
か……？

戦闘は避けられなかつた。ロナート卿の槍を剣で受け止めながら、
ベレトは問いかけた。

「ロナート卿。あなたの正義は、いつたいどこにあるのですか。」

「知れたこと！ 我が息子に無実の罪を着せ処刑したあの女狐を討
ち、無念を晴らしてやるのだ……！」

激しい憎しみの籠もつた声。しかし、同時に同じくらい深い悲しみ
が感じられた。

「あなたは、我が子のために戦つていると。……ならば何故、アツシユ
の願いを聞かない？ アツシユもあなたの子供ではないのか。それ
とも、養子だからと切り捨てるつもりなのか？ そうではないはず
だ。アツシユがあなたをこれほどまでに慕つていたということは、あ
なたもまた彼を愛していたからではないのか？」

「……。」

黙りこくつたロナート卿に向かつて、ベレトは言葉でたたみかけ
た。

「ロナート卿、確かに亡くなつた息子さんの敵討ちは、あなたにとつて
大切なことかもしれない。それでも、愛する息子の為を思うなら、
アツシユのことを思うなら、ここで剣を引くべきではないのか。」

「……。」

「それに、アツシユはあなたのことを本当に慕つている。その気持ち
を踏みにじるというのなら、あなたは父親失格だ。」

「ロナート様……」んなことは、どうがもう、おやめください。義兄さ
んに報いるための方法なら、他にもきっとあるはずです。」

アツシユも言葉を添える。ロナート卿はしばらくじつと黙りこ

くつていたが、やがて大きく息をつき、武器を下ろした。

「……ガスパール全軍に告ぐ。戦いをやめ、撤退せよ！」

「ロナート様……！」

「すまなかつたな、アツシユ。わしは復讐にのまれ、大切なものを忘れてしまつていたようだ。礼を言おう、若きセイロス騎士よ。お前の説得が、わしにそれを気付かせてくれた。」

どこか憑き物の落ちたような声で、ロナート卿は言った。それからカトリーヌに目を向け、少し険しい表情で続けた。

「カサンドラ。貴様とレアが憎いという気持ちは変わらぬ。また別の形で決着をつけさせてもらうぞ。」

「ああ。アタシとしても、アンタとの因縁がこんな形で決着を見るのは不本意だったさ。……だが、レア様がこんなことを認めてくださるか？」

そう言われて、ベレトも気づいた。ここでロナート卿とカトリーヌを説得したところで、大司教たるレアがロナート卿の処断を命じれば、すべては無駄になつてしまふ。レアは今までも、背教者に対してはかなり厳しい罰を課してきた。レアをも説得することはできるだろうか？

「……ならば、これを渡せ。」

そう言つてロナート卿は、書簡を取り出した。

「こいつは……？」

「西方教会の者どもが立てた、レアの暗殺計画が記されている。暗殺計画を告発してやつたとなれば、あやつもわしを切つて捨てるとは言えぬはずだ。」

「レア様の、暗殺計画……！ それも、西方教会の連中が……。助かるが、いいのか？」

「構わぬ。納得のいく答えを得る前に死なれては、わしが困る。」

「そうかい。確かに受け取つたよ。……アタシも、いつかアンタに全てを話してやるよ。納得がいくかは分からぬけどね。」

カトリーヌは書簡を受け取り、懷にしまつた。

「では、わしはガスパールに戻る。民たちを労つてやらねばな。」

「ロナート様、僕も行かせてください。弟たちの様子を確かめたいのです。」

「それじゃ、アタシらで戦後処理だな。ベレト、アンタも手伝ってくれ。」

こうして、ロナート卿の反乱は、一応は平和的な結末を迎えたのだった。

大修道院に帰還してしばらくすると、ベレトはレアから呼び出しを受けた。レアとセテスの待つ謁見の間に一人で向かう。

「カトリーヌから事の顛末は聞いています。ロナート卿を説得したのは、あなただと。单刀直入に問いましょう、何故そのようなことをしたのです？」

レアの声は穏やかだったが、同時に淡々ともしていた。

「彼を討つことは、最善の道ではないと考えたからです。」

「具体的に説明してくれ。」

セテスが厳格な口調で問う。

「ロナート卿は、最愛の息子を教団に処刑されています。そして、それが無実の罪であると信じていたようです。フォドラの多くの民にとって安寧の証たるセイロス教団も、ロナート卿にとつては憎き仇でしかなかつたことをご理解いただきたい。」

「どのような理由があろうと、他の信徒に危害を加えかねない罪深き者には、罰を下さねばなりません。」

「それだけではありません。」

レアの有無を言わざぬ口調にもひるまず、ベレトは主張を続けた。

「ロナート卿は、多くの領民から慕われていました。多くの領民にとって良き領主であつたロナート卿を討てば、彼らは教会に不信感を抱くことになるでしょう。そうなれば、また新たな反乱の種を撒くことになります。そもそも、ロナート卿の反乱も教団による処刑が原因でした。教義に背く姿勢を見せた者を片端から処刑・討滅していれば、自然と教会への不信は募る一方でしょう。今回はいち領主のみの行動でしたが、これが複数の大貴族、あるいは国家規模での蜂起であ

れば、どうでしようか。重要なのは、敵を滅ぼすことではなく、敵を作らないことなのでは。」

「……。」

レアは沈黙していたが、やがてセテスのほうが口を開いた。

「……確かに君の言うことももつともだ。だが、それは君自身にも言えることだと思う。事前に相談があれば、我々も別の策を検討できるだろう。今後は、まず行動するのではなく報告してほしい。」

「分かりました。以後、気を付けます。」

「大司教、この者の指摘は、私も以前より気にかかつていてのことです。急進的でなくとも、少しづつでも体制を変えていく必要があると、私も考えています。」

レアは、またしばらくの沈黙ののち、いつもの穏やかな声で答えた。
「……良いでしょう。ただし、セテスの言うとおり、行動で示すことはせず、事前に相談するようにしてください。今回の件は不問とします。ロナート卿に関しても、あなたの指摘について検討する必要があるでしょう。」

「ご理解いただき感謝します、大司教。」

ベレトは頭を下げ、謁見の間を後にした。結局レアを直接説得することにはなつてしまつたが、ひとまず今後の糧となりそうな種を蒔くことができた。一人でも多くの命を救うため、これから何ができるかを再び考え始めるベレトであつた。

青海の節1 地駆ける灰狼

今節は、女神再誕の儀が行われる。ただでさえ厳重な警備が敷かれる中で行われる儀式であるうえ、前節にロナート卿が告発した西方教会の暗殺計画の件もあり、ベレトもセイロス騎士団の一員である以上は警護に専念せざるを得ないはず。今節は大した行動はできないうだろう……と思つていた矢先に、レアからの呼び出しを受けた。

「ベレト。今節、貴方には特別任務を命じます。」

「特別任務……ですか？」

「ええ。詳しい内容説明は、このアルファルドから受けてください。「紹介にあずかりました、アルファルドです。ジエラルト傭兵団のベレト君ですね。どうぞよろしく。」

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

アルファルドという名に聞き覚えはなかつたが、彼の顔には見覚えがあつた。いつだつたか、母の墓前に花を供えたいと申し出てきた修道士だ。口ぶりからして、両親のことは昔から知つていたらしいが、それ以外のことは何もわからない。

「後のことは任せましたよ。」

レアは執務室へと戻つてゆき、その場にはベレトとアルファルドだけが残された。

「では、改めて自己紹介を。私はアルファルド。教団から、アビスの管理を任されている者です。あなたは、ここ最近アビスに出入りしているそうですね？」

「どうしてそれを……？」

「おや、そんなに驚かないでください。責めるつもりはありませんから。管理者である以上、アビスで起こつたことは自然と耳に入つてくるのです。前節は、灰狼の学級の生徒たちに付き合つて、盗賊団を討伐してくれたと聞きましたよ。彼らを手伝つてくださつて、ありがとうございます。」

「いえ、大したことはしていません。」

このアルファルドという男、穏やかな物腰の裏に、何か得体の知れ

ないものを感じる。それが何なのかまでは掴めないが……。そういうえば、花を供えに来ていたとき、不祥事で教団を追放されたというような話をしていた気がする。これから先、彼が教団を追放されるような不祥事を起こすというのも、妙な納得感がある。

「それでは、そろそろ本題に入りましょう。まず一つ目は、帝国貴族ゲルズ公爵家領まで出向いていただきたい。」

「ゲルズ公爵？」

「帝国の外務卿を務める六大貴族の一角です。教団は、公爵が不法に保有している『英雄の遺産』の引き渡しを要求し説得を続けているのですが、今のところ応じる気配はありません。そこでこの度、公爵の知己である灰狼の学級のコンスタンツエに交渉役として白羽の矢が立つたわけです。彼女を含む使節団の護衛が、あなたの任務です。こちらには、あなたの他にも騎士団員が同行することになっています。」「わかりました。」

非公式の学級であるはずの灰狼の学級の生徒が、教団の正式な使者として派遣されるというのは、なんとも奇妙な話ではある。そこに頼るということは、頼らざるを得ない状況であると考えるのが無難だろう。ゲルズ公との交渉は、相当に難航しているらしい。

「二つ目の任務は、『女神再誕の儀』が行われる間の、アビスの見張りです。アビスの住人の中には、賊やごろつきという類の者も少なくはありませんからね……こういう時になると、どうしても教団からは冷たい目で見られがちになります。どうせ騎士を遣るのなら、彼らにとつても顔見知りであるあなたが適任と思い、セテス殿に推薦したのですよ。」

「なるほど。」

「では、頼みましたよ。最初の任務には今週の末に出立となりますから、それまでに用意を整えておいてくださいね。帝国から帰つて来次第、二つ目の任務にあたつてください。」

――――――

そして出立の日の朝。玄関ホールには、ゲルズ領への使節団としてコンスタンツエとベレト、そして他に数名のセイロス騎士が集まつて

いた。その中にはガープたち、ジェラルト傭兵团の面々の見知った顔もあつた。そして――

「いつたい、なぜ貴方たちがここにいるんですの!?」

ユーリス、バルタザール、ハピが揃つて姿を現したのだ。

「ゲルズ家にある遺産つてのをこの目で一度拝んでみたくてね。」

「俺は帝都に用があつてな、どうせ帝国に行くならついでだろ。」

「で、三人とも行くならハピもついてこうかなつて。一人で留守番

じや寂しいじゃん?」

「……つうわけで、俺たちも同行させてくれねえか?」

「つうわけで、ではありませんわ!」

コンスタンツエの激しいつつこみが入る。

「これは教団の正式な仕事ですよ! そんな軽い気持ちでほいほいとついて来させるわけにはいきませんの。特にユーリス、貴方は何か企んでいるとしか思えませんし。そうでしょう?」

「自分に聞かれても……。」

突然同意を求められ、ベレトは困惑する。

「だが……自分個人としては、別に構わないと思う。この三人なら実力もあるし、たとえ何か企んでいたとしてもこれだけの数の騎士があれば対処できるはずだ。」

「だそうだが、どうだ? コンスタンツエ。」

「くつ……どうせ私に貴方たちを止める権限はありませんもの。仕方ありませんわね。」

「というわけで決まりだな。よろしく頼むぜ。」

「というわけで、最初の予定よりも随分賑やかな一行でゲルズ領へと向かうことになつたのであつた。

――――――

ゲルズ領までは、特段これといった事件もなく、旅路は順調かに思われた。しかし、異変は突然に起つた。

「もう間もなく、政庁が見える頃かと思われます。」

「……待て、何か騒がしいぞ。ありや……盗賊か?」

ユーリスの言葉通り、前方に見える街のほうには、賊らしい風体の

者たちが何人も見える。そんな中、コンスタンツエは目ざとく見覚えのある顔を見つける。

「そんな、あれは……！ ゲルズ公爵閣下が襲われておられる模様……微力ながら救援に参りましよう。」

「クソッ、何でこんな状況に……！ とにかく、さっさとゲルズ公と合流するぞ！」

ユーリスとコンスタンツエが先陣を切つて駆け出す。ベレトたちもそれに続いた。

「コンスタンツエ、お前はゲルズ公を助けに行け！ 僕はこっちの賊を片付ける！ バルタザール、ハピ、お前らはコンスタンツエと公爵の援護だ！」

「ガープ、ベリアル、三人の援護に向かってくれ。残りの皆で盗賊たちを抑える。」

ユーリスとベレトがそれぞれ指示を飛ばし、戦闘が始まつた。

「おいてめえら、どこの盗賊団だ？ 何が目的——」

「うあああ……ああああ……！ 邪魔……するなあつ！」

「うおつ、何だこいつら！ 正気じやねえぞ……！ 気をつけろ！」

ユーリスが問い合わせようとした盗賊は、目が血走り理性を失つたような状態で襲い掛かってきた。他の盗賊たちも皆同じような状態で、焦点の合わない目をギラつかせて武器を振り回している。

「くつ……盗賊風情に不覚を取つた。この遺産を奪われるわけには……！」

遠くでは、ゲルズ公が魔法で応戦しつつ、盗賊から必死に逃れようとしていた。

「む……？ あれは……まさか教団の手の者か？」

遠くにセイロス騎士団らしき一団を見つけ、ゲルズ公は複雑な表情を浮かべた。できれば教団にも遺産を渡したくはないが……命あっての物種だ。渡さぬ口実は身の安全を確保してから考えれば良い。「やむを得まい、今は救援を求めるか……！」

騎士団がこちらへ着くまで、耐えるほかあるまい。終わりのわからぬ地獄よりは、まだ希望があるだけましというものだろう。

「ゆび……わ……置いて……うあ……お、おおおおお！」

「遺産に触れるな！ これは奪わせんぞ！」

また斬りかかってきた賊の攻撃を躊躇つつ、反撃にファイアーアーを撃ち込む。炎の魔法弾はしつかりと命中し、敵は確かに絶命した。そのはずであつたのだが……

「ゆび……わ……よこ……せええエエアガアアアアツ!!!」

「な……!?」

ゲルズ公は我が目を疑つた。倒したはずの賊の身体から黒い霧のようなものが立ち上り、それが徐々に形を変えてゆく。

「な、何だ、この化け物は……!?」

「ギヤオオオオツ!!」

ゲルズ公を襲っていた盗賊は、魔獣の姿に変わり果てた。「公爵閣下に近づいた賊徒が異形の獣に……！ いつたい何が……？」

天馬を駆り、ゲルズ公に近づこうとしていたコンスタンツエは、信じられない光景に目を見開いた。

(このようなことが自然に起こることは考えにくいでしょう。闇の魔道か呪詛の類のはず。ならばどこかに術者が……)

空の上から戦場を俯瞰して、コンスタンツエは注意深く辺りを観察し始めた。……いた。怪しげな黒衣の魔道士の集団が、ゲルズ公の様子を窺つている。

「おい、コンスタンツエ！ どこ見てやがる？」

「あちらに、この騒動の黒幕らしき人物を発見致しました。彼らを討てば、事態を収められるやもしれません。」

「でも、先にゲルズ公を助けたほうがよさそーじやない？ けつこうまずそうな状況だけど。」

見れば、さらに別の賊も魔獣に姿を変え、ゲルズ公へと迫つてゆくところだつた。そして、さらにもうひとり……。

「閣下ほどの方が魔獣程度に後れを取るとは思えませんが、数が増えれば万一ということもあるでしょう。ゲルズ公が亡くなられては困りますわ。死者とはお話しできませんので。まずは魔獣どもを殲

滅するのが先決ですわね。」

コンスタンツエは天馬の手綱を引き、ゲルズ公と魔獸たちの間に舞い降りた。

「君は……コンスタンツエか!? あのヌーヴエル子爵家の……」

「お懐かしゅうござりますわ。たいそう危ない状況のようですね。」

「君に私を助ける義理はないだろうが……手を貸してもらえぬか?」

「どうぞ命令なさつてください。従えぬはヌーヴエル家の名折れでござります。」

へりくだつた態度で挨拶しつつ、魔獸に向け魔法の雨を降らせる。ハピとバルタザール、騎士たちも追いつき、コンスタンツエとともに魔獸への反撃を開始した。

「魔獸の相手なら得意だし。さっさと終わらせちやおうよ。」「魔獸だけじゃなく、盗賊も近づけさせるなよ。魔獸になる前に倒しちまうぞ!」

ゲルズ公を取り囲むように防衛線を張る。

……その様子を遠巻きに見つめていた者がいた。先ほどコンスタンツエが見つけた黒衣の魔道士——ミュソンだ。

「邪魔が入ったか……獸どもめ。増援を出せ。あの男の持つ指輪を奪うのだ……。」

ミュソンの合図に合わせ、市街の各地から増援が現れ始める。こちらは賊ではなく、彼らの正規兵だ。

「増援の……到来ですか? 申し訳ありませんが、邪魔なさらないで。」「これは……あまり余裕がなさそうだな。自分たちも公爵の援護に向かおう。」

ベレトやユーリスたちも加勢に加わり、戦いは激しさを増していく。何度も危うい場面はあつたものの、大半の盗賊は魔獸化する前に対処できており、正規兵たちも人数をかけて当たればさほど苦労する相手でもなく、気づけば敵軍はほぼ全滅し、残るはミュソンと周囲の一団だけとなつた。もちろん、ベレトはじめ騎士団の面々が多くの敵を捌いていた。

「このまま敵将を撃破するぞ。目にもの見せてやれ!」

ジエラルト傭兵団が敵軍に一斉突撃し、相手が動搖したところを一気に叩く。

「これで決める！」

ベレトの剣がミュソンを捉え、その身体を吹き飛ばした。

「ぬう……力ばかり強い獸どもめ……。遺産の回収はならず、か。……まあ良い。実験の成果があれば問題なかろう……。それに……」

ミュソンはベレトへどこか恨めしげな視線を向けたかと思うと、転移の魔法で姿を消した。街は、突然に静寂を取り戻した。

「助かった、か……？」

「はあ……クソツ、散々な目に遭つたな。何だつたんだよあいつら……。」

「私めのような不詳の身では、疑問にお答えすることなど到底できませんわ。」

「……心当たりはある。また追々説明しよう。」

敵兵たちの青白い肌、正気を失つた賊たち、魔獸と化す人間。ソロモンたちのおぞましい所業の数々が、それらに重ね合わされる。こんなところにまで彼らの魔の手が及んでいたとは、知らなかつた。

「ああ、公爵閣下がご無事で何よりでございます。遺産も盜られませんでしたし。」

「ああ……君たちのおかげだ。今日ほど肝が冷えた日はなかつたよ。」

「ええ、スレンの冬よりも冷えましたわ。私どもには荷が重たい相手でございました。不本意に操られていたばかりであろう方たちを救えなかつたのも、首魁らしき方を取り逃してしまつたのも、すべて私の責、私が無能だつたゆえ……。公爵閣下と遺産を守り切れたことのみが、まさに奇跡と言えましょう。」

「コンスタンツエ……見る影もないな。過去の出来事が、君をそこまで……。」

知己らしいゲルズ公とコンスタンツエは言葉を交わしている。公爵は、コンスタンツエが二重人格であることを知らないらしい。地下で見たような、自信に満ち満ちているコンスタンツエしか知らないかつたのなら、この豹変は確かに衝撃的だろう。

「……だが、君は私を救つてくれた。その恩には必ず報いたいと思う。いや、今日の恩だけではないな。私は君の両親にも大きな借りがある。教団が君を派遣したのも、それを見越してのことだつたろう……。」

「両親はともかく、私に恩を感じることなど無用ですわ。報いていただく必要も……」

「いや、そこは素直に報いてもらえよ。遺産が必要だろ？」

ユーリスが呆れたように口を挟む。それを聞いてゲルズ公は、持っていた『英雄の遺産』らしき物を差し出した。いくつもの指輪が細い鎖で繋がつていて、ちょうど片手に嵌められそうな形をしている。

「ああ……これを持つていつてくれ。受け取れなければ君の仲間に渡そう。『ドローミの鎖環』という。オーバンの紋章に対応する英雄の遺産だ。ダグザに伝わっていた宝物でね、講和の際、彼らが友好の証として差し出してきた。」

「なぜダグザに英雄の遺産が？」

「古の時代、聖セイロスは十傑やそれに与する氏族たちを討伐していつたという。氏族の長の中には、討伐の手から逃れ、海の向こうを目指した者がいたのかもしれない。」

「なるほど。ではもうひとつ、なぜ教団の要請に応じなかつたのです？」

「私は帝國の外務卿だ。手札は何枚あつても困ることはない。特に教団に対しては切り札にもなる。近年、帝國と教団の関係は冷え込んでいるしな。だが……私は外務卿失格だな。私情を優先してしまった。今は亡き友人と、その娘への恩返しに……手札を手放そうとしているのだから。」

「公爵閣下……。」

コンスタンツエは胸を打たれた様子で、静かに俯いた。

「さて……私はそろそろ政府へ帰らねばな。達者で過ごすのだぞ、コンスタンツエ。」

「閣下こそ。どうか、お元気で……。」

ゲルズ公はベレトたちに頭を下げ、去つて行つた。

「さて、遺産も無事に手に入つたことだし、俺たちも大修道院へ戻ろうぜ。」

「ああ、そうだな。あの魔道士たちのことも報告しなければ。」

「あー……ちょっと待つちやくれねえか？」

完全に帰る雰囲気になつたところで、バルタザールが呼び止める。

「なんだ、金でも落としたか？」

「いや違えよ。そもそも落とす金なんてねえよ。で、本題なんだが……そもそも俺がここに来た理由、覚えてるか？」

「ん？……ああ、何か帝都に用があるとか言つてたな。一人で勝手に行くもんだと思つてたが。」

「いや、これがそもそも言つてられない事態かもしれないくてな……。最初は地下の面子だけでなんとかなると思つてたが、もしかすると騎士団の力も借りなきやならんかもしれんのさ。」

「バルト、いつたい何やらかしたのさ。」

「なんでおれがやらかした前提なんだよ！　まあいい、とにかく聞いてくれ……。」

バルタザールは真剣そのものという顔つきで語り始めた。

「さつきの魔道士、遺産の回収がどうとか言つてたよな。だつたら奴らは、他の遺産も狙つてくる可能性があるだろ？　だから、奴らに奪われる前に遺産をこつちで回収しなきやならねえ。」

「確かにそうですわね。しかし、英雄の遺産はすべて教団の管理下にあり、所在地も王国や同盟の貴族家のばず。何故帝都に話が繋がるのか、私の浅学では到底理解することは叶いませんが……。」

「今まさに教団の管理下にない例外を回収したばかりだろうが。……こいつの他にも管理外の遺産があるんだな？　で、それが帝都にあらつてわけか。」

「話が早くて助かるぜ、ユーリス。そうだ、その通り。もともとは、おれの母の故郷で大切にされてた、一族の秘宝みてえなもんらしくてよ。それがどつから情報が漏れたのか、この間、盗まれちまつたんだ。」

「遺産が、盗まれた……？」

「おう。そしてその遺産が、帝都の闇市に出るつて噂があるのさ。
……こいつを取り戻しに行きたいんだ、おれはよ。」

バルタザールは、重々しくそう告げた。

青海の節2　闇に入らずんば光を得ず

帝都アンヴァルの片隅。怪しげな商人たちが簡素な市を並べ、傭兵ともごろつきともつかない用心棒たちが道行く人々の顔をじろりと睨んでいる。帝都の人々は、漂う陰鬱な雰囲気に怯えるように、自然とその区画を避けて通っていた。アドラステアの繁栄の象徴たるアンヴァルの、もうひとつ姿だ。

「目的のものは手に入れた……。これがあれば、我が娘が……！」
「はい、必ずやお嬢様を救えましよう！ 急ぎ領地に……」

そんな人通りのほとんどない通りを、足早に駆ける一団がいた。薄汚い闇市に似つかず整った身なりをした男と、彼の従者らしき女性が数人。男の手には、とげとげしい形の籠手らしきものが握られている。

「閣下、お待ちください！ 何やら街のほうが騒がしい様子……。
「な、何だ！ 賊か？ これだけは守り切らねば……！ ……追手と戦う用意をしてくれ。」
「はい、承知いたしました！」

――――

同じ頃、闇市の別の片隅。バルタザールの故郷から盗まれたという謎の遺産を求めて闇市を訪れた一行は、用心棒のごろつきたちに囮まれていた。

「先程から言つているとおり、自分たちにはこの市を取り締まろうという気などない。ある品物を手に入れたいだけだ。」

「さすがにその格好で取り締まる気がねえってのは無理があるぜ、騎士さんよお。油断させておいて襲うつもりなんだろがよ？ 僕たちも黙つてしまつ引かれるつもりはさらさらねえんだわ。」

セイロス騎士の正装のままで来たのはまずかつたか。闇市の者たちに無用な警戒をさせてしまつたらしい。いかにこちらがセイロス騎士団の精銳といえども、さすがにこの数を相手にするのは厳しいかもしれない。なんとか説得を試みるべきだろうが……。

「そう焦るんじゃねえ。俺様に任せときな。」

そう言つて前に進み出たのはユーリス。

「ところでてめえら……裏の社会に生きてるからには、俺様の顔くらいは見たことあるんじゃねえか？ この世に一人といねえ美少年の顔をよ。」

「あ？ ……！ てめえは、まさか……『狼の牙』の頭か!?」

「ごろつきたちの一人がユーリスの正体に気づく。他の者たちも、『狼の牙』の名を聞いた瞬間に顔色を変える。

「よくわかつてるじやねえか。なら、誰に従うべきかもわかるよな？」

「へ、へい！ なんでも好きなように見ていいでくだせえ！」

「物分かりのいい奴で助かるぜ。さて、探し物といこうか。」

「おう。……ユーリスお前、帝都でも顔が利くのか。なら、ついでに顔を貸してほしい件があるんだが……」

闇市の中に進みながら、バルタザールが何か思いついたらしい顔でユーリスに声をかける。

「俺様の顔は高いぞ。たぶん、てめえの借金よりな。」

「まだ借金の話とは言つてないだろ！」

「なんだ、違うのか？」

「いーや、図星だ。お前の名前で借金のひとつやふたつ消せやしないかと思つたんだが、どうもこいつは頼む相手を間違えたみたいだな。」
バルタザールはぼやきながら、市の商品をひとつひとつ確認していく。騎士たちも市の中に踏み入り、バルタザールの言う謎の遺産を捜索する。

「ん……あつちの人たち、なんかやけに急いでるみたいだけど。逃げてるみたいで、怪しいし。追いかけたほうがいいかな。」

ハピが走り去っていく一団に気付いた。

「コンスタンツエ、天馬で回り込んでくれ。自分も後から追いかけ
る。」

「承知いたしましたわ。」

コンスタンツエとベレトで挟み込むように一団に接近する。貴族らしい風体の男は、手元に何やら抱えている。布で覆い隠されているが、端から棘のようなものが覗いている。？遺産と同じ材質のよう

に見える。

「待て。止まつて、手元の物を見せるんだ。」

「くつ、セイロス騎士に見つかってしまったか……！　これを渡すわけには……なに、回り込まれたか!?」

「失礼いたしますわ。誠に僭越ながら、逃げ道は私が塞いでおりますわ。」

逃げ道を塞がれた男は、明らかに焦燥している。

「さあ、その手に持つているものを、こちらに渡していただこう。」

「き、貴様ら、近寄るな！　こうなつてはこの力を使うしか……！」

「！」

男は手の中の布を投げ捨てた。奇妙な形をした籠手らしいものが、男の手に嵌まっていた。

「やめろ！　そいつは英雄の遺産と同じシロモノだ！　紋章を持つてねえ奴が振るえば、恐ろしい獣になつちまうぞ！」

「うるさい！　娘のためなら命など惜しくもない……！」

ベルトの背後でバルタザールが叫んだが、男は聞く耳を貸さない。力づくでも包囲を抜けるつもりのようだ。

「何の恨みもないが……許せ、家族のためなのだ！」

男の振るう謎の遺産と、従者であろう女性の魔法がベルトを襲う。しかし、相手が悪かつた。時を何度も戻し、繰り返したベルトにとつて、扱い慣れない武器での攻撃など、恐るるに足らない。ベルトは最低限の動きで攻撃を回避し、男の手を狙つて剣を振るう。斬るのではなく面で叩き、男の手から籠手を弾き飛ばした。男は籠手に飛びつこうとしたが、ベルトが先に籠手を回収すると、諦めたように大人しくなつた。

「よし、いいぞ。……悪いが、こいつはおれの大変なものなんだ。それに、危険なものもある。あんたの事情は知らないが、こいつを渡すわけにはいかない。」

「……それに、人の命がかかっているとしてもか？」

「なに？」

「我が娘が人質に取られているのだ。『英雄の遺産』を差し出せば娘

を助けてやると、青白い肌の魔道士に取引を持ち掛けられている。だから……私はどうしても、その“遺産”が必要なのだ。

男は懇願するようにバルタザールを見据える。と、コンスタンツエが何かに気付いたようだ。

「恐縮ですけれど……もしやそのお顔、オツクス男爵では？ 私の記憶の正確性は甚だ怪しいものですが、おそらく数度お目通りしたことかが。

「……ああ、その通りだ。私はオツクス家の当主だ。セイロス騎士団ならば、我が娘が……モニカが、数節前行方不明になつたことは把握しているだろう？」

なるほど、この男はモニカの父親だったのか。となると、“英雄の遺産”的取引を持ち掛けたのは、クロニ工かその仲間だろう。偽モニカがガルグ＝マクに潜入してくる角弓の節までには、本物のモニカは殺されてしまうのだろうが……今、青海の節に、彼女はまだ生きているのだろうか？ これから先の未来に起ることを知つてゐるベレトとしては、少し引っかかる部分がある。偽モニカがガルグ＝マクに現れたのは角弓の節。モニカが攫われてから、ゆうに6節もの時間が経つてからだ。単に偽モニカを潜入させることだけを考えるなら、それほど長く待つ必要はないはずだ。その理由は何だ？ ベレトの立てた仮説では、それは「本物のモニカが生きているから」だ。万一一、本物のモニカが彼らの隙を突いて脱出するようなことがあれば、偽モニカの正体が明らかになつてしまふ。本物のモニカを完全に亡き者にしてから、やつと偽モニカを潜入させたのだろう。

人体実験なども平氣で行う者たちの下にいる以上、無事に、という保証はできないにせよ、モニカがまだ生きている可能性は信じるに足るはずだ。かといって、遺産を馬鹿正直に渡したところでモニカを救えるかというと、望みは薄い。

「一方的に遺産だけを奪われてしまう可能性が低くない以上、これを渡すわけにはいかない。だが、別の方法で力になることはできるかもしない。……来節の末まで待つてもらえないだろうか。それまでには必ず、ご息女を救出してみせる。」

「なに、来節だと？　それまでの間にモニカの身に何かあればどうするのだ。」

「信じてもらうより他はないが……来節までは、自分の推論が正しければ、だが彼女が生きていることは保証できると思っている。」

「正直、信じ難いな。しかし、残念なことに、私にはお前たちに抗つてそれを奪い返せるほどの力もない。今、私が取れる選択肢の中で最も確実なのは……お前を信じることだ。だが、来節までの間も、私なりに娘を救う努力は続けさせてもらうぞ。どうかそれだけは許してくれ。」

「協力に感謝する。」

よし、なんとか遺産を手中に留めることには成功した。あとは、男爵を裏切らぬよう、モニカを救出するだけだ。

――――――
「遺産を守り切れたのはいいが……男爵の娘つてのを、本当に救えるめどは立ってるのかい？」

今度こそ大修道院への帰路についた時、バルタザールが訊ねた。
「ああ、策はないわけではない。ただ、少し不確実ではあるな。」

「博打つてわけか。燃えてくるねえ。」

「人の命が懸かつた賭けに燃えるんじやねえよ。……いいか、ベレト。俺からひとつ忠告だ。『勝てるかもしれない賭け』になんて挑むなよ。必ず『勝てる賭け』に挑むんだ。どんな賭けだつて、あらゆる可能性を予測して備えときや、必ず勝てるようになるもんだ。」

「半端な覚悟では挑むな、ということだな。わかつた、あらゆる手を尽くそう。必ず、助け出すことができるよう。」

ユーリスの忠告を受け、ベレトは改めて自分の策を見つめなおした。……まだ、改善の余地は多くある。

――――――

「（）苦勞様でした、ベレト。思いがけず、ふたつもの『英雄の遺産』を回収できました。回収されたふたつの遺産は、『灰狼の学級』の生徒たちに貸し出すこととしました。」

「大司教が彼らと話し合い決定したことだ。節末の『女神再誕の儀』の

警護では、彼らは君の管轄の下にある。もしものことがあれば、彼らの持つ遺産の力が役立つだろう。」

帰還後、他の騎士から報告を受けたレアとセテスに呼び出され、ベレトは謁見の間にいた。

「そして、オックス男爵の件についてです。これまで一切の足取りが掴めていなかつたモニカについて、このような手がかりを発見できることは大きな進歩です。」

「他の騎士とも連携し、捜索に臨むように。行動の際には、必ず報告することを忘れないでくれ。以上だ。」

セテスに念を押され、ベレトは謁見室を出た。モニカ救出のための最初の一 手を打つ。そのために、ベレトはイエリツツアを捜し始めた。